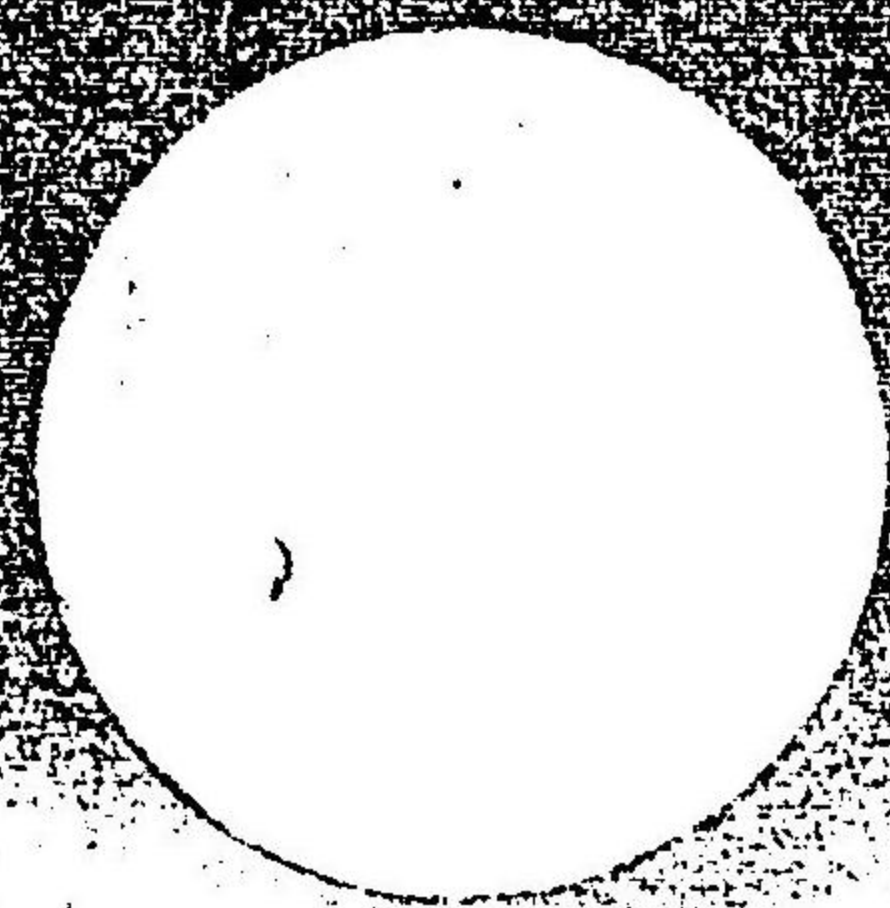


216  
274

敬  
管  
見





宗教管見序

宗教は如何なるものなるやと云ふに就て其解答區

々として定する所なし是れ蓋し宗教なるものは極

大深遠にして鑽れば愈堅く仰げば愈高く容易

に文字言句を以て之を表示し盡し難きによらずばあ

らず然れども容易に表示し盡し難ければとて其表示

の業を停止せんか其妙致は愈埋没せらるゝに至らざ

るを得ず之に反して一段の表示は一段の效用あり難

ければ難き程吾人は愈勉めて表示の業を進めざるべ

からざるなり今回楠龍造君の自家の信仰を披瀝して

「宗教管見」を宣揚せらるゝも蓋し亦此事業の一端たる





ものとすべきが、

然り而して宗教表示上に於ては、或は理論の形式により、或は實際の徴驗により、其體裁甚だ相異なるものありと雖ども、其結歸する所は、即ち共に以て吾人をして轉迷開悟の要旨に達せしむる者たらずばあらず、その理論にせよ實際にせよ、其能く人心警覺の効用を呈するものは、蓋し理論の裏に實際を含まざるべからず、實際の内に理論を容れざるべからざるなり、此書の如きは、是れ専ら實際的の徴驗を以て主要とするもの、即ち其表面に於ては、一種の信仰經驗談に過ぎざるものなりと雖ども、其内部には著者が多年の研鑽に得たる

深奥なる理論的根據を包容するものにして決して、彼の理論の難透を避けて、偏に實際に出づるものゝ空談と同一視すべきものにあらざるなり、

明治三十四年正月東京本郷森川街浩々洞内樹心窟

臘 扇 生 滿 之 識



## 自序

見ずや牽牛花は僅か一朝の榮に過ぎざるも、夏日其日々々の義務を怠たらず、吾人は此花より教示を受けざるべからざるなり。人は自己の信ずる所を行ひ、理想とするものを實現せんとを要するなり、信ずる所理想とする所にして、若し其あやまれるを知らば、直に反省悔悟し、若し眞善ならば世と共に人と共に能ふだけ努力するは、人類の本務にあらずや。竊に思ふ此小冊子の生命は牽牛花より短く、此小冊子の思想は牽牛花より脆弱ならざるかと、されど短くも弱きも義務は遂行せざるべからざるなり。本書を公にする所以の精神全く此

處にあり。此書初の五章は人類の何をなさざるべからざるかと論じ、次の三章は信仰の如何なるものなりやと論じ、次の三章は信仰の人類及び社會に及ぼす影響を論じ、次の六章は吾人のとる所の佛教を論じたるもの、殊に讀者の精讀と批評を望む。附録は同窓の親友曾我君の宗教に對する意見を述べたるものなり。嗚呼人生は無限の永劫に比すれば誠に短く、無際の宇宙に比すれば實に微なりと雖、人は自己の何ものたるやを自覺し、人としての大道を踐まざるべからず。吾人は普通教育を受けたる青年諸君の、此書を一讀して如何なる感想を惹起せらるゝかと、知らんことを切に願ふ。



明治三十四年一月枯柳影瘦せ白露繁き朝京都客舎  
にて誌す

楠 龍 造

宗 教 管 見

目 次

其 一。	人は自己を自覺せざるべからず……………	一 頁
其 二。	神聖なる活動……………	九 頁
其 三。	良心の尊嚴……………	一八 頁
其 四。	自然の大道……………	二三 頁
其 五。	自己の運命……………	三〇 頁
其 六。	信仰の準備……………	三五 頁
其 七。	信仰の経過……………	四〇 頁
其 八。	信仰の成立……………	四五 頁
其 九。	宗教信者の二方面……………	五〇 頁
其 十。	自然道徳……………	五五 頁



其十一。生存競争と宗教……………六二頁

其十二。吾人の佛教(實相論なり)……………六六頁

其十三。吾人の佛教(因果必然なり)……………七五頁

其十四。吾人の佛教(無我なり)……………八二頁

其十五。吾人の佛教(慈悲なり)……………八八頁

其十六。吾人の佛教(理想的最上の人格なり)……………九二頁

其十七。佛教家としての吾人……………九七頁

附 録

余が信仰

曾我量深



楠 龍 造 著

其十一。人は自己を自覺せざるべからず

人は己れ自身を知ること最も少し。

シセロ

水を掬せざれば善農となる事能はず、筋脈を断ざれば善工と成  
 べし、能はず、肩背を傷けざれば善賈と成る能はず、死地を踏まざ  
 れば善士となる事能はず。

産 語

飢て食ひ渴して飲む、これ果して人の人たる所以なるか、寒ければ服し  
 疲勞すれば休息す、これ果して人の人たる所以なるか、悲哀に泣き歡喜  
 に躍る、これ果して人の人たる所以なるか、人生八十營々促々一死至り  
 て萬事休す、これ果して人の人たる所以なるか、此の如きは烏雀の飢ひ  
 は食をあまり飽て林間に歌翔する、何の異なる所がある、猿鹿の山野に、



自然的慾望に支配せられ、一生を終了するものと何の異なる所がある、然れどもこれは進化の頂上たる人類を、正當に解釋せるものにあらざるなり、人間は飲食衣服の如き生理的生活の外に、猶ほ其上に尊嚴なる精神的生活の存するあり、故に人間を解釋するに、唯だ生理的生活を以てするが如きは、宇宙の大道たる進化の法則を侮辱せるものと云ふべし、されど社會は日々に複雑になりゆき、生存競争時々増加し來るを以て、滔々たる多數の人、眼をパンの一方に專注し、また他を顧みず、其極パンこそ人間唯一の目的なれと迷溺するに至りしは、獨り下層の勞動社會のみならず、政治家も法律家も教育家も宗教家も、文學者も紳士も、皆同一職なり、豈に悲むべき現象にあらずや、

精神的生活と稱する中種々の區分ありと雖、最後にして最高に位するものは宗教なり、智力的生活中科學は其部を分て、實驗と觀察により、その現象と法則を組織的に研究し、例せば天文學は天體の現象と法則を

研究し、植物學は植物の現象と法則を研究し、動物學は動物の現象と法則を研究する如く、誠に智識の確實なるものなりと雖、例も箱に小石を詰めたる如く、各々區域を嚴守して他に關せず、その自己領分内の智識を學ぶと雖、總てを統合せる智識を與へず、哲學は渾然たる一系の智識を與ふと雖、これ唯だ智識慾を満足せしむるに止まり、未だ人間を支配する中心の力となる能はず、此人間の最後の力となり、人に順逆兩境に動せざる不動心を與へ、苦樂錯雜の中に處して綽々安慰を與ふるものは宗教なり、宗教的生活は人間進歩の頂上なり、生理的生活を肉の生活と稱すれば、宗教的生活は靈の生活なり、此宗教的生活の興味は、他の諸般の事物と異く、經驗によりて味ふべきものなり、宗教は修養尤も肝要なり、

人とは何ぞや自己は何物ぞや、これ人類たるものゝ大に決定せざるべからざるの問題なり、若し人の人たる所以を知らず自己の何物たるを



悟了せずして、一生八十年、醉生夢死、昏々朦々として経過し去らば、人類の價值、それ何處にかある、人類の自己を真正に認識悟了せるとき、始めて人類の生命を得たるものと云ふべし、若し自己を認識悟了せざるときは、假令其人は通常人と云ふと雖、真正の人と云ふを得ざるなり、否、高尚尊貴なる人間と云ふを得ざるなり、支那の聖人孔子云はすや、

朝聞道夕死可矣

朝に道をきゝ、之を了悟すれば、此處に人たるを得、夕に長へにさめぬ眠に入るも、亦遺憾なしと云ふを得べし、若し百年の長壽を保つも、人たるの大道を悟了せざれば、未だ人たるを得ず、人たるを得ずして、死の手にとらる、百年短からずと雖、殘懷少きにあらず、孔子の一言、誠に、人生の樞奥を道破せり、浄土宗の故行誠上人の歌に云く、

はりつたふ鼠の道も道なれど、

まことの道は、人の行く道

嗚呼滔々たる現時の世界、はりつたふ鼠の道を學んで、之を以て至極とし、人の行く道を以て迂となし、措て問はざるは何と云ふことぞ、吾人は古代希臘の「タイオゼテス」が、白晝燈を點して人を探りたりと云ふ、奇矯の行爲を笑ふ能はざるを覺ゆ、

古代より人間を觀察するに二様の方面あり、一は人間を以て極めて微弱無力なるものとみ、其位置より論ずれば、萬有無限の大海に於ける一粟に過ぎず、其時間より論ずれば、始をしらぬ過去際より終を知らぬ未來際の永劫中、朝に生れて夕に死すて、ふ蟬蛸の生命に過ぎず、此位置に於て此時間に於て果して何事をか、なす、子子の水中に上下するに異ならざるにあらずや、人事泡の如く「アレキサンダー」豪なりしと雖、今何處にかある、「ワシントン」純潔なりしと雖、今何處にかある、「ロンドン」「パリ」の繁榮も、まさにこれ一場の夢、嗚呼觀じ來れば、人間なるもの豈にあはれむべきものにあらずやと、一は人間を以て尤も尊貴有力なるもの



とみる、孟子は、  
萬物皆備于我

華嚴經には

心如工畫師、造種々五蘊

と云ふ、宇宙は大なりとは果して誰れか之を言ふ、我にあらすや、山高水長とみるは果して誰れか之をみる、我にあらすや、無限を無限なりと云ふは、我にあらすや、吾人は五尺内外の身長を有し、八十年前後の壽命を有するに過ぎざれども、一切萬有人事百般皆自己に攝屬せざるなし、學者の考察は、杳遠なる大空の星にも及び、英雄の一呼は、世界を風靡す、人間の偉力豈に驚くべきにあらすやと、此二様の觀察は互に相反すと雖、其實人には斯の如き二方面を有するものなり、若し人間を自然界の一物とし、客觀の地位に置て之を考察するときは、人間は誠に微弱無力なるを感ずと雖、若し自己を主として宇宙を觀察し來れば、宇宙の大も悉く自己に攝屬せざるなし、嗚呼然らば即ち自己は有力か無力か、有力なれば無力なる能はず、無力なれば有力なる能はず、自己は小か大か、小なれば大なる能はず、大なれば小なる能はず、畢竟此矛盾を如何解釋すべき、吾人の考察する所に上れば、人類は世界進化の行程中、現在其最高の地位を占領し、大空の星辰を觀察し、深海の魚貝を檢討するの微妙の智力を有するのみならず、善を愛し、美を慕ふの情あり、また自己の何者たるやを自覺し、自己の何をさいるべからざるやを決定する力あり、吾人は無限の空間無限の時間より觀察すれば、蘇東坡の如く、

滄海一粟、悲我生須臾、

の感生し來らざるを得ずと雖、翻て一考すれば、宇宙の精粹集て我にあり、宇宙の眞善美我之を希望し、我之を顯現するの力あり、これ我の本職なり、牽牛花は僅に一朝の榮に過ぎずと雖、忘りなく自然の本職をつくすにあらすや、櫻花風に散り易しと雖、時來れば花を開て自然の本職を



つくすに非ずや、嗚呼高上尊貴なる人類、自然が汝に智を興へ愛を興へ希望を興へ、靈を興へたるは何の爲ぞ、汝一生八十年、醉生夢死せしめん爲と思ふか、宇宙の大、各部分の總和にあらずや、一の活動は一切に關係せり、一即一切なり、吾人人類たるもの、真正に自己の本職をつくさば、宇宙に貢献し、進化をたすくるものなり、吾人は自然の寵兒なり、自然に従順し、また自然をたすけざるべからざるなり、嗚呼自己の何者たる、また自己の何をなさいるべからざるを、知り、之を行ふ、これ吾人の宗教、涅槃經に云く、

一切衆生悉有佛性

華嚴經に云く、

奇哉々々、具有一切衆生悉如來智慧德相、

吾人は自然が附與せる佛性を明にし、如來の智慧德相を顯現するにあ  
るのみ

其二。神聖なる活動

Hast not! Let no thoughtless deed nor for aye the splits speeds!

Ponder well, and know the right.

Onward then, with all thy might.

Haste not! years can ne'er atone for one reckless action done

(Goethe)

「日々新又日新」とは、湯之盤のみならず、吾人の心に銘すべき千古の金言にあらずや、日々新ならんと欲せば、日々活動せざるを得ず、日々活動せざれば、唯に新ならざるのみならず、日々停滯腐蝕するに至る、人間社會は峻坂に車を押すが如し、若し進まざれば必ず退く、人間の一生は神聖なる活動を繼續するにあり、然るに世に往々誤想を懐くものあり、乞ふ

一一之を評破せん

(一) とも人間の唯一の目的は、巨多の財産を貯蓄し、自己は廣家樓臺に



袖手安臥し、逸樂を恣にするを以て、こよなき満足なりと思ふもの多々、  
 豈にあやまれるの甚しきにあらずや、嗚呼人は何のために四肢を具へ  
 たるものと思ふや、眼は色彩を見るがためなると同く、耳は音響を聞か  
 んが爲にあると同く、四肢は四肢の活動をなさしむるがためにあるに  
 あらずや、亦吾人は靈妙なる心的能力を具へたるは、之を活動せしめん  
 がためにあるものならずや、然るに之を活動せしめず、無爲逸樂に耽溺  
 するが如きは、恰も有用の貨物を山野に放棄し、豊饒の土地を荒蕪に委  
 するが如きものと云ふべし、天物を暴殄するの罪決してかるからざる  
 なり、是れひとり道德上に於ける罪人なるのみならず、天然に對する大  
 罪人なり、また他の方面より觀察するに、眞正の快樂なるものは、適當の  
 活動より起るものにして、眼に適當なる活動を與ふるものは、色彩の美  
 なり、耳に適當の活動を與ふるものは、音樂なり、智に満足を與ふる活動  
 は、眞理なり、美意識に満足を與ふるものは、調和なり、齊一なり、統一せる

尊嚴なる精神に興ふる活動は、宗教なり、これ心理學上の事實にして疑  
 ふべからず、無爲逸樂飽食暖衣、決して人間に大満足を與ふるものに  
 あらず、米國大富豪の「嬢、ロックスフェラー」なる人、富有は幸福なりやの問  
 に答て曰く、

Happy? Are there not many things to make us quite unhappy, which money can  
 not change? And then, are not the spoiled ones more sensitive to the principles of life  
 than the others? No, I am not happy, and you may tell it to and sundry who envy  
 me.

(幸福? 誰人の金錢を以て幸福を買ひ能ふか、金錢を以て代り能は  
 ざる多の不幸は我々にあらざるか、而して放恣に生長せし人は、他  
 人より浮世の道理を深く感ずるにはあらざるか、否、妾は幸福にあ  
 らず、足下は妾を怨む種々の人々に之を告げ玉ふべし)

吾人は「ロックスフェラー」嬢の言の眞實なるを知る、無爲逸樂を以て目的



とする人の、切に反顧せんことを望む、

(二) 東洋従來の習慣より、退隱靜息を以て高潔とし、活動を以て俗なりとする、ことこれなり、然れども、これまた謬れるものにあらずや、固より人間は、其出處進退を明白にし、去るべき時には、如何なる顯官も之を一擲して顧みず、如何なる高職も之を棄て顧みざるは、丈夫の本領なりと雖、活動を以て俗となし、退隱を以て高潔とするは、あやまれり、本來活動と靜息は一物の兩面にして、活動せんと欲せば靜息を要し、靜息は活動を要求するものにして、其間に於て價値の甲乙を論ずるが如きは、謂はれなき妄論なり、更に尅實して之を論ずるときは、世界の事物は唯だ活動のみにして靜息なし、靜息と云ふは、一活動の他の活動に轉じたるの名なり、然るに若し活動を以て俗なりと云は、世界何物か俗ならざらん、實に不通の議論と云ふべし、老莊の如く世間の活動を嘲罵し、竹林の七賢人の如く白眼以て世上を冷視するは、こよなき謬見なり、よし斯の

如く甚しからずとするも、山林に隱遁するを以て、超俗など稱するは、其宜しきを得たるものにあらず、要するに吾人の議論は、其の靜養のときにあたり、山林に徜徉し、明月に嘯ぶ、悠々自適、固より可なりと雖、同様に社會の事業に奔走し、孜々盡力、大に活動するを以て、極めて尋常のことなりと感ぜざるべからずと云ふにあり、

(三) 世にはまた人生及び社會を惡觀視し、一もとるに足らざる如く思ふものあり、また人生を兒戲なりとするものあり、元來人間は善惡併せ行ひ、時としては惡の分量は善の分量より大なるならんも、全然人生を惡觀するは、其宜きを得たるものにあらず、唯だ吾人は「ハルトマン」の所謂改善主義をとりて、善惡を改め善美をとるべきのみ、かくして善美を増長せしむることをつとむべし、是れ確實なる主義なり、是れ不可動の主義なり、全然人生及び社會を惡觀するは、事實に背反せるのみならず、人をして希望と勇氣を滅絶せしむるもの、これ惡魔の宣言なり、死谷の



主義なり、また人生を見戲なりとするは、半悟の偽宗教家、偽哲學者より往々聞く所なり、人生は何故に見戲なるか、吾人は何故に見戲をなさざるべからざるか、若し必然の理法により、誠心誠意を以てある行動をなすもの、何故見戲なるか、吾人は吾人として是非成さざるべからざる行動をなす、これ何故に見戲なるか、彼等は人生は見戲なりと云ふは、自己の眞摯誠實の精神を有せざるを發表するものにあらずや、假令世上往々「サイノカワラ」の童子、石を積む如く、積みては壊され、壊されては積み、其結局なき笑ふべき舉動多しと雖、これ其人の智識の不完全より生起するもの、決して見戲と同一視するを得ず、吾人は福澤翁が「福翁百話」に於て、人生の根底は見戲なりと云ふ見解に對し、翁のため大に悲まざるを得ざるなり、人間は本來眞摯なるべきものなり、誠實なるべきものなり、清淨なるべきものなり、宇宙の眞理と一致すべきものなり、隨て其活動も眞摯誠實清淨ならざるべからざるなり、眞理と一致せざるべから

ざるなり、

以上吾人は活動主義に反する諸説の妄を評破せり、然し乍ら此處に注意を乞はざるべからざるは、活動と云ふは學術技藝宗教教育政事經濟等の、人生必須の事業に活動するを云ふものにして、決して殺人偷盜の悪事を働くを云ふものにあらず、若し人生必須の事業にしあらざれば、其心力を勞すると果たまた體力を勞するを問はず、一室に閉坐して宇宙の眞理を冥想すると、郵便を配達して戸々を運ぐるとを問はず、廟堂に在て天下の政治を議すると、田畝にありて栽培に従事するとを問はず、皆なきはめて尊重すべきものなり、若し一の紙屑拾の微職なりとも、誠實に之に従事するものあらば、吾人は其尊重すべきものたるを知り、腐敗せる政治家紳士より幾等其上にあるを信するものなり、唯か黄金の一片は腐蝕の大塊より劣れりと云ふか、「カールライル」云はずや、

So here hath bean dawning



another blue day:

Think wilt thou it if

Slip useleß away.

Out of Eternity

This New Day is born;

Inte Eternity.

At night, will return.

(意譯)

あけぼの白くあらはれて

あたらしき今日生れけり

過ぎ行く駒の早やければ

ひなしく今日を去らしむな

\* \* \* \* \*

此日どこより出でさしか

かぎり知られぬ永遠か

かぎりしられぬ永遠に

夕暮くれば歸りいく

\* \* \* \* \*

嗚呼吾人は決して此白日を空過せしむべからず、少年の時には少年の職分あり、壯年時代には壯年の職分あり、老年時代には老年の職分あり、誠實に此職分をつくすもの、之を神聖なる活動と云ふ、





其三。良心の尊嚴

人心惟危、道心惟微、執則存、舍則隱

書經

一切衆生貪瞋疑、諸煩惱中有如來身、乃至常無染汚、德相備足如我、

如來藏經

今日世上を通觀するに種々の倫理主義あり、利己主義あり、功利主義あり、進化主義あり、義務主義あり、其他數へ來らば十指を屈するも猶ほ足らざらん、されど吾人の信する所によれば、何れの主義によるも、其倫理を實行せんとせば、必ずや良心に依て之を行はざるべからず、恰も食物に種々ありと雖、口に依て之を食せざるを得ざるが如し、或人は云ふ、良心は盲目なり、複雑せる問題に向ては、其正邪を判定する力なし、其判定する所のものは、世間一般に承認せるありふれたるもののみと、然り良心は複雑なる問題に向て、正邪を感ずる能はず、こは全然

智力に上らざるべからず、されど其智力によりて判定せられたる物に向て、正のなすべく不正のなすべからずと感じ、正をなさしめ不正をなさしめざるものは良心にあらずや、若し良心なからんか、智力に依て如何に之を判断するも、到底其正なるものを行ふ能はざるべし、恰も如何に地理にくはしきも、道案内に達せるも、足なくしては、實地其處に到達し能はざると一般なり、今日多數の人、足なき道案内者、足なき地理家なり、吾人は其説をさくを喜ぶ、されど其人と同伴なる能はず、これ良心を蔑如せるの結果なり、況んや實際道德上の行動は、その善惡を臆別するの困難にはあらずして、之を實行するの困難なり、諸般日常の人事、一度虚心、淡懷之を内に省察せんか、十中八九は正邪分明なり、唯だ其良心に従ふと否とによりて、行爲黑白の差生起するに至る、或人は云ふ、良心は國に依て異り、時に依て異り、人に依て異り、千差萬別一様に論すべからず、さればかゝるものを頼みとするを得ずと、然り良



心は人に依てことなり時處位に依て異なるは事實なり、然し乍ら人々により良心に差異あると同時に、また共通のものあるを知らざるべからず、今日の時代にありて、誰れか竊盜を善と云ふものあらん、殺人を善と云ふものならん、詐欺を善と云ふものあらん、各人の良心に共通なるものあるを知るべきなり、固より其良心の鋭敏なると遲鈍なるとの差ありと雖、良心は全然個人的となすは大にあやまれり、一國に共通なるものあり、一時代に共通なるものあり、世界に共通なるものあり、万世に共通なるものあり、其共通の點に於ては、自他共に異論なきを以て、固より之に従順せざるべからず、また其差異の場合に當ては、理性の力により、公平に徐るに利害得失正邪善惡を檢查し、其善と決定したるものに向て、良心は之を自己の所有とするなり、良心は過失に墜ることありと雖、過失の自覺するときは、虚飾することなく、非を遂げんとすることなく、翻然之を改むるを以て、常に健全正大なることを得べきなり、孔子云

君子過、猶日月蝕、改則人見之、

唐の善導、念佛行者の操行を論じて云く、

念々稱名常懺悔

嗚呼人誰れか過なからん、過て改む、これを誠に健全なる人と云ふべきなれ、

古來の聖賢偉人、皆此明暗をたる良心に背かざるを主義としたり、釋迦

尊は、

自淨其意

「マテ」の基督は、

意のさよきものはきなり

支那の王陽明は、

我心光明亦何憂



とも公明正大俯仰天地に耻ざる行爲は、自己自から省みて疚しからざるものこれなり、世間の制裁を恐れ、法律の制裁を恐れ、神の制裁を恐れ、そが行爲を規定するが如きは、他律的道德にして、到底徳の至れるものあらざるなり、此の如き他律的道德は、假に世間の制裁なく、法律の制裁なく、其他外部の壓迫なくば、如何なるをなすも、少しも憚かるに及ばずとするもの、此の如き道德は人をして表裏あらしめ、陰猾ならしむる恐あり、而して此良心の活動を完全ならしめんと欲せば、固より聰明なる智力、鍛練せる意志の力をかり、且つ常に良心の命令に従はんと、鞠躬盡力するよりして、其効果を奏することを得べし。

其四。自然の大道

有佛無佛、世間相常住、

大品般若經

白露の、おのが姿は、其まゝに、もみぢにかける、紅の露一 休  
道在近、 中庸

諸君は彼日本魂を表すてふ櫻花を見ずや、陽春氣暖なる時、霞霧雲の如き美化をひらき、一旦時を經れば落花續々として黄泥に委ぬ、花の開くは開く理ありて開くなり、花の散るは散るの理ありて散るなり、是れ自然の大道なり、花の開くを見て喜び、花の散るを見て悲ひは、また人情の自然なり、吾人は自然の大道に隨はざるべからず、自然の大道によりて安心を得ざるべからざるなり、吾人は花の開落するの自然の大道なるを知ると同時に、花の開落するを見て悲喜の情を催すの自然なるを信するものなり、されば吾人は悲喜の情を禁斷せよと云はず、唯だ悲喜の



情を恣にして、其極理性の力を麻痺し、妄に笑ひ狂ひ泣き悲み、花の開落するの自然の大道なるを、妄却し去ることをいましめんと欲す、然れどもまた花の開落を見て一點の感興だも引き起さず、頑然たること瓦石の如きことあらば、これまた人情自然の大道にあらざるなり、同情は決して故なくして賦與せられたるものにあらざるなり、涙は決して故なくして所有するものにあらざるなり、

東風吹かば、香おこせよ、梅の花

あるじなしとて、春なわすれを、

こは菅原道真、太宰権帥に貶せられ、まさに發せんとするに臨み、其庭園の愛梅に向てよみたる歌にあらすや、これを誠にうるはしき自然の人情と云ふべし、

つくぐぐと、おもひ暮して、いりあひの、

鐘をきくにも、君をこひしき、

後醍醐天皇隱岐の國に幽せられしとき、其子恒良親主のよみ玉ひし歌なり、こは親子自然の情にあらすや、

ますらをば、なげかぬものを、別路の、

袖に草葉の露やかゝれる、

嗚呼誰れか丈夫は涙なしと云ふ、釋尊は涙なかりしか、基督は涙なかりしか、親鸞は涙なかりしか、孔子は涙なかりしか、ワシントンには涙なかりしか、グラッドストーンは涙なかりしか、吾人は理性を重ずると同時に情を重せざるべからざるなり、換言すれば理性に基ける情を重せざるべからざるなり、情は奔馬の如し、理性は手綱をとれる人の如し、若し理性の手綱を緩めなば、其情の奔馬はいづれの處に行くや知るべからず、或は斷崖の下に落ちることもやあらん、或は岩石に躓て損傷することもやあらん、危険云ふべからず、然るに理性の手綱にして其當を得ば、馬は歩調を整へ、能く目的地に到達することを得べし、吾人の生死問題に關す



る、また此見解にて足れり、生は花のひらけるなり、死は花の散れるなり、これ物の變化なり、自然の大道なり、理性の方面より云へば喜ぶべきこともなく悲むべきこともなし、印度の龍樹の「空」と云ひ、支那の王陽明の「虚」と云ふも、此方面の觀察なり、されど生には生の道あり、死には死の道あり、吾人は此道を知り、此道に従はざるべからず、我にして良心に従ひ理性に従ひ、能ふだけ其本務を盡しつゝありとせば、何時死の手に襲はるゝも、清く涼しきこと、秋天の明月の如くして、永眠の床に静にふすことを得べし、若し我にして本務を盡さざることを自覺せば、負債をのこして旅する如く、胸中常に安からざるものあり、死に臨んで猶ほ安からざるなり、我師親鸞の所謂平生業成ならざるべからざるなり、支那の禹王は、

生者寄也、死者歸也

と云ふ、誠に無限の妙味あり、宇宙は父母なり、吾人は其寵兒なり、生と云

ふも死と云ふも、父母の家にありて運動すると休息するとの差に過ぎず、運動するときあれば休息するときあり、これ自然の理なり、唯だ注意すべきは、運動するときはよく運動し、休息するときはよく休息せよ、吾人は釋迦世尊入涅槃に際し、弟子に教誡せる語の、如何に清淨光潔にして吾人を教ふるの大なるをみる、遺教經に云く、

汝等比丘勿懷悲惱、若我住世一却會亦當滅、會而不離、終不可得、自利々人法皆具足、若我久住、更無所益、應可度者、若天上人間皆悉已度、其未度者、皆亦已作得度因緣、自今已後我諸弟子、展轉行之、則是如來法身常住而不滅也、

人間の生死に處する、此の如くにして少しも遺憾を見ずと云ふべし、自然は常に本來の實相を露呈し、其大道を教へ、科學は自然を研究するものにあらずや、哲學は自然を思索するものにあらずや、宗教は自然に安するものにあらずや、聞けよアジソンシの詩の一節



Soon as the evening shades prevail,  
 The moon take up the wondrous tale;  
 And, nightly to the listening earth,  
 Repeats the story of her bath;  
 While all the stars that round her burn,  
 And all the planets in their turn,  
 Confirm the tidings as they roll,  
 And spread the truth from pole to pole.

(意譯)

夕暮くれば月いで  
 くしと話をものかたり  
 夜毎くくに地球まで  
 彼の生れを告ぐるなり

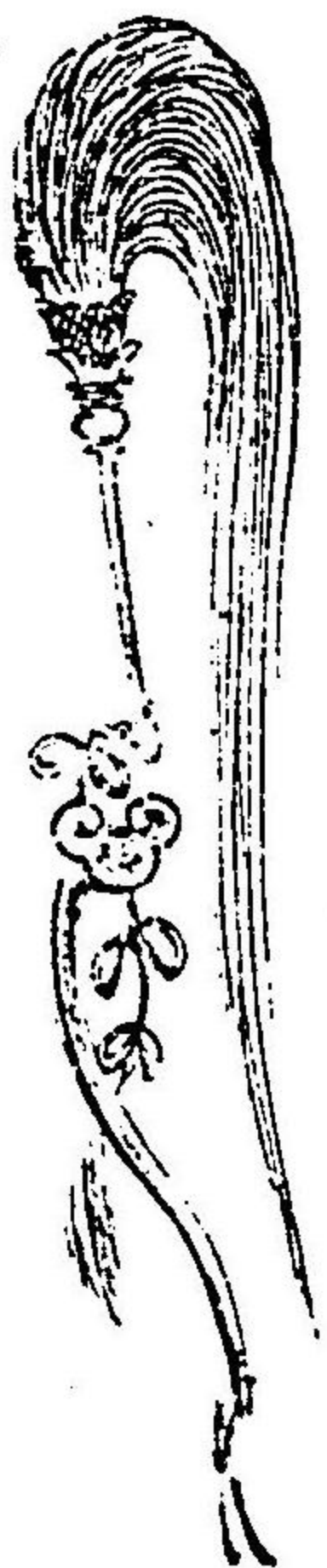
\* \* \* \* \*

月のまわりにてる星を  
 凡の行星みなどにも  
 月の話をたしかめて  
 真理をよみに傳ふなり

\* \* \* \* \*

黄山谷曰く

溪水長廣舌、山色清淨身、





其五。自己の運命

Make hay while the sun shines.

英國の諺

あすありと思ふ心は仇櫻、よるに嵐は吹かぬものかは

親 鸞

自己の運命は果して如何なるものなりや、自己は之に對して何をなさ  
いるべからざる乎、靜に胸上に手をあて、考一考し來らば、誠に無限の  
感に打たれずんばあらざるなり、世界は無常なり、自己も他人も社會も  
國家も須臾も止まらず、人には生老病死あり、國家に興廢存亡あり、若し  
更に尅實して之を論究すれば、一時間も一分間も一秒間も一刹那も遷  
流して止まざるなり、見よ、パピロンの榮華も過去の夢となり、羅馬の強  
大も、今はむなしく旅人追懷の種となれり、今日世界の舞臺に英露しき  
りに覇を争ふも、焉ぞ知らん他日人をして今日人の羅馬を忍ぶ如きあ

らしめんとは、また之を個人の上に徴するに、存覺法語は尤も巧みに感  
情的に述べたるをみる、

老少不定ノサカヒナレバ、サカリナルヒトモオホクユク、生者必滅ノ  
コトハリナレバ、老ヌルヒトハマシテトマラス、鳥部山ノケフリ、ミ  
チニモノホリフモトニモタツ、ワシモイツカソノカスニイラン、アタ  
シ野ノ露、アシタニモキエ、ユフベニモオツ、タレトテモヨソニヤオモ  
フベキ、

人生は無常なり、世界は無常なり、ヘラクリタスの轉變なり、これ宇宙の  
眞理なり、されど吾人は決して人生を惡觀する厭世を主張するものに  
あらず、世界を呪咀する病的人世觀を有するものにあらず、吾人のとる  
所のものは、神聖なる活動主義なり、樂天主義なり、一種の良心主義なり、  
一種の自然主義なり、然し人生及世界の無常なることは、不可動の事實  
なり、眞理なり、試に三更夢さめ萬籟寂たるとき、自己幼年よりの友人の



身上を一考せよ、幼年の竹馬の友は幾人かある、小學校以來の友は幾人かある、あるは既に黄泉の客となり、あるは既に遠方に去り、今日親しく往來するものは、寥々雨夜の星も唯ならざるにあらずや、此一事に依て微するも、人世の轉變無常なることは、異議を云ふ能はず、吾人の主義は此事實の上に立つものなり、此真理のうへに立つものなり、人生は無常なり、世界は轉變なることは、宇宙自然の大道にして、少しも疑惧すべきものにあらず、少しも怪訝すべきものにもあらず、岸頭によせくる海波の、離れては合し、合しては離れ、高まりては下り、下りては高まると同一の事理なり、吾人は此自然變化の世界の中にありて、本心と理性の命する所に従ひ、幼年時代は幼年の本職を全うし、青年時代は青年時代の本職を全うし、壯年時代は壯年時代の本職を全うし、老年時代は老年の本職を全うするにあり、其本職を全うするこれ神聖の活動なり、斯の如して世界を観察せよ、心裕に體ひろく、緯々爽然たるものあり、吾人の所謂樂

天(或は樂道なるものは、大家高樓に坐し、美衣を飾り、美食に飽き、放恣安居の、一時的肉體的快樂を意味するものにあらず、さればまた世上の反對批難、或は衣食の困難、天災地妖等の加き不幸なる境遇を滅却して、然る後に樂天の境に至るにもあらず、諺に「風は吹けども山は動せず」と云へることあり、こは山の動せざるは吹きすさむ風を止めたる後、動せずと云ふにあらず、吹きしきる風の中にありてあれすさむ嵐の中に立て、山は泰然として動せざるなり、吾人の樂天なるものまた然り、陋屋に處するも無限の安慰あり、飢を凌ぐも無限の安慰あり、世の批難に蝟集せらるゝも無限の安慰あり、こは信仰を有せざる人の知り能はざる所なり、孔子云へるあり、

君子素其位而行、不願乎其外、素富貴、行乎富貴、素貧賤、行乎貧賤、素夷狄、行乎夷狄、素患難、行乎患難、君子無入而不自得焉、

我師親鸞、帖外和讃に歌ふて曰く、



\* \* \* \* \*

超世ノ悲願キキシヨリ  
 ワレラハ生死ノ凡夫カハ  
 有漏ノ穢身ハカハラテド  
 コ、ロハ淨土ニスミアソブ

\* \* \* \* \*



其六。信仰の準備

偶獲信心、遠慶宿縁、

Rome was not built in a day.

親 鸞

吾人嘗てかゝる話をきく、一婦人「カール」に書を寄て曰く、妾は人生の問題に就て大に苦惱しつゝあれば、願くは明解を賜はれよと、「カール」答て云く、無益の事を企る勿れ、貴女の仕事箱には亂れし糸のあらざるか、あらば先づそれを整理せよ、貴女の箆筒には亂れし衣服のあらざるか、あらばそれを整理せよ、斯の如くなれば人生の問題の自然に了解するに至らんと、吾人は誠に「カール」の言の至理あるに感服するものなり、彼の徒らに口角沫を飛して人生問題を論じ、宗教の本旨を討議するが如きは、決して其問題の眞意義を會得す能はざるものなり、また一室に閑坐し沈思冥想に耽けるも、決して其眞意義を會得し能は



ざるものなり、人生の眞意義なるものは、人間の本務を誠實につとむる處の日常の経験よりして、其眞意義を味ふことを得、理論固より大切なり、されど理論のみにては吾人に満足を與ふることを得ず、理論は單に説明に過ぎざればなり、之を日常の行爲に實驗することにより、始て其眞味を會了せらるべし、禪家の所謂「冷暖自知」とは是なり、古來の宗教家預言者聖賢偉人なるもの、信仰安心は、皆自己の経験よりして之を建立せるもの、釋迦然り基督然り、孔子然り王陽明然り、フシントン然り、グラットストン然り、皆幾度か準備につくし素養につとめ、種々の境遇に處し、進みては倒れ、倒れては進み、其間の経験よりして確乎たる信仰を得るに至れり、今日の宗教を談するもの、或は人生を談するもの、實際上の経験よりせずして、唯に論理上よりのみ之を談じざらんとするは、吾人少しく遺憾なき能はざるなり、そも信仰確立の準備條件となるべきものは、

(一) 日常自己の本務を完了することをつとめよ、

(二) 眞理を求め眞理の爲めには一步も曲げされ、

(三) 賢人徳者に近けよ、

(四) 誠實なれ、

(一) 人間は信仰によりて支配せらるべきものなり、其人の言行も其人の思想も、其根底たる信仰より出で來らざるべからざるなり、されど其信仰なるものは、先天的に人間に有するものにあらずして、修養と實驗によりて、之を得べきものたるなり、されど修養と實驗とは日常の行爲の外にあるにあらざれば、日々起り來る愉快なること不愉快なること、樂しきこと悲しきこと、複雑艱難なること單純平易なること、利益を及ぼす所のこと損害を及ぼす所のこと、其他千緒萬端の境遇に處して、自己の本務を完了することをつとむるは、慥に人生の旨趣を悟了する大準備大原因たるものなり、若しも日常放恣懈怠にして、本務の何物たるを



願慮せざるが如きとあらんか、これ人生に向て眞學の注意を用ひず、人生の旨趣に向て一向無關係の人なれば、斯の如き人は決して信仰を得べき時機あらざるなり、(二)信仰は純潔なり、一點の詐欺を許さざるなり、若し微少だも詐欺を許さば、これ信仰の性質を損害するものと云はざるべからず、されば信仰確立の條件としては、眞理を愛し眞理に服し眞理のためには一步だも曲げざるを要す、恰も二に二を加ふれば四になると云ふ如くならざるべからざるなり、此間に少しの曖昧も少しの増減も加ふるを得ず、時に従ひ處に従ひ、都合よき説明を施し、便利なる解釋を與へ、一時を瞞過し去り、眞理は斯くナリ、又ハ斯くナラザルベカラズ」と云ふ見識なき人は、幾星霜をふるも幾十年を経過するも、決して信仰を得る能はず、今日の偽學者偽宗教家紳士紳商は、概ね此素質を缺く、嘆すべきの至りなり、(三)信仰は以心傳心ならざるべからず、靈によりて靈に傳へざるべからず、吾人は天然より實に偉大なる靈の教訓を受

くることを得べし、また書籍よりも偉大なる教訓を受くるを得べし、されど眞人はと吾人に直接に深遠に大なる感化を及ぼすものはあらざるなり、よし眞人ならざるも、眞人に近きを求めて之に接するときは、恰も明鏡に對して自己の容貌をみる如く、そが自己の過失缺點の何處にあるやを見出し、また自己の何を爲さざるべからざるやを看取せしめ、大に發奮興起せしむるなり、吾人若し信仰を確立せんと欲せば、信仰ある人に接すること尤も要中の要なり、(四)人生を見戲視し、或は人生を面白半分に觀察する人は、到底信仰を得べき人にあらず、これ無縁の衆生なり、一闍提の輩なり、信仰は實に誠實と誠實の觀察によりて得らるべし、「カーライルの所謂 Sincerity ならざるべからざるなり、佛說大無量壽經の至心ならざるべからざるなり、



## 其七。信仰の経過

怠たらず行かば、千里の外も、みん、牛の歩の上し遅くとも

家 康

物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣、

大 學

人間の一生涯、其思想と云ひ其感情と云ひ、年と共に智識と共に経験と共に變化するものなり、若し夫れ一個の人間にして年と共に次第に完全に成熟するものありとせば、孔子の所謂

吾十有五、而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩、

此志學而立不惑は猶ほ信仰確立までの経過中の段階と見ざるべからず、天命を知るに至てまさに真人の地位に達したるものなり、されど人間の多くはかかる秩序的経過によらずして、種々の事情と境遇により、

種々の變化をなすもの多し、然し乍ら其大體に至ては、孔子の言は確乎として動すべからざる眞理あり、吾人の思考する處によれば、人類心靈の安立に就て三段の過程あり、こは眞宗に云ふ所の三願轉入と畧々同一なり、

(一) 討究進取の時代　こは十五歳前後より三十前後迄の心的状態にして、まさにこれ年少氣鋭、意氣天を衝かんとする時代なり、あらゆる問題に向て討究を試み、疑雲を拂はざれば止まず、一難をこゆれば更に一難に向ひ、一關を通過すれば更に一關に向ひ、其狀冒險家の遠征を試みるが如し、此時の心的状態は迅速なる變化なり、いさましき動轉なり、決して湖水の寂然としてすめるが如きにあらずして、千仞の瀑布急轉直下し來るに似たり、其間躓て倒るゝことあり、倒て起き得ざることあり、これ屈せずして進むなり、固より此時に當ては、一定の信仰なるものなく、常に變化動搖して止まず、此時は自己中心の時代なり、自力中心の時代



なり、真宗の十九願の時代なり、見るべきものあらば、見ざれば止まず、聞くべきものあらば聞かされば止まず、捉らるべきものあらば捉へざれば止まず、行くべき所あらば行かされば止まず、此時代の特色は勇氣なり、變化なり、疑惑なり、師親鸞は多年學びたる聖道門を棄て、淨土門に歸する時なり、孔明草舎を出で、三分の計を策するときなり、吾人は斷言す、此時代にあたりて老成を氣取る勿れ、沈溺を恐れずして、懷疑の深淵に臨め、峻坂に恐れずして、希望の高山に進め、四十二章經に云く、

佛言夫爲道者、如牛負重行深泥中、不敢左右顧視、出離於游泥、乃可蘇息、此時代にありては深泥中の牛の如くならざるべからざるなり、左右を顧視せずして、蕩直に進前するを要す、

(三)修養的安立時代 一輪の明月天にかゝれりと雖、浮雲時に之を蔽ふ、吾人の精神、止住すべき基礎を得たりと雖、妄想妄念屢々起て止まざるなり、吾人は努力して此妄想妄念を排斥せざるを得ず、若し努力を怠ら

んか、妄想妄念全勝を占め、我をして惡魔の俘囚たらしむ、暴風はやみたり、疾風は晴れたり、されど彼處に一朶の暗雲の横れるあり、此處になどりの風のそよぐあり、戒慎を要するはまさし、此時、修養的安立時代はこれに類せり、これ壯年時代の一般の状態なり、三十前後より五十前後の状態なり、此時の信仰は霞を隔て、山を見るが如く、猶ほ朦朧たるものあり、未だ明淨ならざるなり、真宗の所謂二十願なり、

(三)自然的安立時代 此は自然と一致し、ことさらに修飾を用ひず、眞諦を離れずして俗諦に同じ、世の人と共に喜ぶべきに喜び、悲むべきに悲むと雖、其中心は卒然として動かざるなり、恰も官然たる深淵、そが上層は風と共に波たかまると雖、基礎は自若として靜寂なるが如し、其人の行動は雲無心にして岫を出るが如し、孔子の心の欲する處に従へども、矩を越へざる分齊なり、禪家の喫茶喫飯是れ佛事と云ふものなり、宗教的真人は此ときの人を云ふ、こは五十歳以後の時代なり、されど此年代



の配當は、秩序的心靈の修養をなせる人に就て云ふものなれば、極めて大體なるものに過ぎず、精密に之を研究すれば、其天稟其境遇等の異なるに従ひ、或人は三十にして既に自然的安立時代に達せるあり、或人は六十にして猶ほ修養的安立時代なるあり、ある人は中途に挫折するあり、決して一概に之を斷定し去るを得ざるなり、然しながら其年々の遲速如何は、人により一定するを得ざれども、とにかく精神上の安慰を得るに、此三種の時代あることは、動すべからざるもの、自然的安立時代は眞宗の所謂十八願なり、

今日種々の宗教ありと雖、之を二種に大別することを得べし、其一是修養的宗教にして、其一是救濟的宗教なり、佛敎の言語を以てすれば、一は自力的宗教にして一は他力的宗教なり、されど吾人の考察する所によれば、各これ宗教發達の一段階を示すものなり、須く二者を混融してまさに完全なる宗教を見るを得べし、修養を全ふして初て救濟せらるべし、其救濟せらるゝは修養の力なり、修養力によらずして他の救濟を仰がんとするは、これ不合理なり、これ妄想なり、人間を墮落せしめんとするものなり、信仰に依て義とせらるゝはこれ宗教の一面、善に依て義とせらるゝはこれまた宗教の一面、此二面を一體としてまさに全面をみるを得ん、多少語弊あらんも、自力と他力は一物の前後なり、自力進取によりて他力の無爲自然の大道に到達するなり、これ事業をなすにも、初は意識を要すれども、次第に習熟し、遂には無意識に之をなすことを得るに至るが如し、斯の如くなれば、社會宗教の發達の順序と、個人宗教心の發達とは、大に符合するものあるを見るべし、個人の宗教心發達の經過に徴して、社會の宗教を観察すれば、眞正の宗教は、修養救濟合體、自力

他力混融せざるべからざるを知る、



## 其八。信仰の成立

汝天國の定義を聞かんと欲するや、兩親恒に若く小兒常に幼き所  
は即ち是なり、

ユージ

至心信樂忘己

嘆徳式文

凡そ人間に在ては、必ず安心と希望の二なからざるべからざるなり、若し人間にして希望なからんか、誰人も智識を求むるものもなかるべく、道徳を修むるものもなかるべく、職業に従事するものもなかるべく、其寂寞荒涼、怡も未聞不知の曠野に棄てられ、茫然爲す所を知らざる人の如くなるべし、人は希望に依て生き働き、其價値をあらはすものなり、希望の小なる人は其人小なり、希望大なる人は其人大なり、故に若し全然希望なしと云ふ人あらんか、これ精神的に其人の死を意味するなり、人は一生涯希望と離るべからず、亦人にして安心なからんか、此世の苦難

に堪へざるべし、彼處にも衝突あり、此處にも衝突あり、而して世人一般は名譽利益權勢等を競争して止まず、其勢大渦旋の如し、吾人社會にある以上は、また此大渦旋の中にあるものもと云はざるべからず、されば幾多の不愉快の事情は、屢襲來するや疑なし、其他幾多の自然的人爲的苦痛不幸は、常に吾人の周圍にあり、吾人はかゝる境遇にあり、綽々裕然身を處するには、不動の安心なからざるを得ず、若し安心なからんか、風に吹き飛ばさるゝ蝴蝶の止る所なきが如し、豈心細き限りにおらずや、されば完全なる人としての位置を有するには、是非とも安心と希望と具せざるべからざるなり、

そも信仰の成立したる人とは、如何なるものなりやと云ふに健全なる確乎たる人世觀世界觀を有し、安心と希望を有し、之を日常實現する人これなり、安心あるが故、何物をも恐れざるなり、迫害を恐れず、貧苦艱難を恐れず、寒暑飢渴を恐れず、綽々として本務に従ふことを得、基督の十



字架の形を避けざる所以のもの此處にあり、ソクラテスの從容として毒杯を傾くるもの此處にあり、ルイテルの法王と和睦せざるもの此處にあり、師親鸞の流竄をよるこふもの此處にあり、裕梅禪師の珍重大元三尺劍と叫ぶもの此處にあり、希望あるが故、常に活動して止まざるなり、釋迦佛の八十年一日として休息なきは是による、孔子の諸國を周遊して席暖まるに暇あらざるは是による、吾人は信仰成立の人にては、偉大堅確なる、安心と希望を有するとを疑はざるなり、然し乍ら信仰なるものは、理論にあらず、説明にあらず、一の事實なるが故、其真味の如何に至ては、自ら之を経験し體認すべきのみ、

思ふに信仰は決して情のみの生産物にあらず、智のみの生産物にあらず、意志のみの生産物にあらず、智情意混融してなれる所の吾人の思想行為を支配する樞軸なり、理性に背反して決して信仰なるもの成立すること能はず、情を無視して成立するものにあらず、意志なくして成立

するものにあらず、故に其一方に偏するが如きあらば、不健全なる信仰と云ふべし、然し乍ら熱情の人にては、それが信仰も自ら情的に傾き、智力的の人にては、それが信仰も智力に傾き、意志強盛なる人にては、その信仰も意志的に傾くは、こは止むを得ざることと云ふべきのみ、





第九。宗教信者の二方面

孤松秀冬嶺

古 詩

下るはと、人は見あぐる藤の花、

理想と現實と一致し難きは、此世界に在てはまぬがれざる數なり、古歌に

思ふこと、一つかなへば、また二つ、

三つ四つ五つ、六かしの世や、

此歌の眞實なることは、皆な吾人の日常經驗する所なり、現實と理想、此二者畢竟如何か調和すべき、宗教信者に在ては、此二者尤も能く調和しまた尤も顯著にあらはる、古來宗教史上の偉大なる人物の性格を検するに、皆な二種の特質を有せるが如し、其一は自己の非常に偉大なることを感ずること、これなり、自己は佛若くは神の化身、或は其使者たること

とを以て任せり、釋迦佛は多年苦辛の後、無上正眞道をさとりしや、此法は果して世人の了解し得べきやを疑ひ、世人に之を説かずして獨り滅度せんかと迄思たりと云ふ、基督は自ら稱して神の子なりと云ふ、これ欺騙の言にあらす、自らしかく之を感せしなり、孔子は天徳を我に生せりと云ひ、「マホメット」は自ら天の使者なりと云ひ、親鸞は如來の代官なりと云ひ、日蓮は釋迦の使なりと云ふ、其他東西古今の宗教的偉人、皆自己の非常の偉大なることを自覺せり、これ高慢よりするにあらす、胸中確乎たる靈光の耀やくものあらば、自ら然かく感せざるを得ざるなり、今ま大人の眼より、群兒の爲す所を見るに、何となく其群兒の稚氣に反映して、自己の超然たることを覺るが如し、其一は自己の非常に微弱力なることを感ずること、これなり、「ルーテル」は、自己は善に依て救はるゝ能はず、何となれば自己は善をなす力なければなりと云ひ、親鸞は愛欲の廣海に沈没し、名利の泰山に迷惑すと嘆息せられ、法然は愚癡無智の



法然と自稱せらる、其他の宗教的偉人皆な自己の力の微弱なることを自覺せられたり、此二は互に相反對する性質にして、而して並行はるゝものなり、これ信仰の靈光かゝやくが故、自然其偉大なることを感得せらるゝと同時に、また明白に自己の不完全をもみとめ得るに至る、恰も學べば學ぶほど自己の愚昧をさとるが如し、自己の偉大を感ずるは、これ自任の精神を起さしむる根原なり、自己の微弱を感ずるは、これ謙遜の念を起さしむる根元なり、大自任の精神かるが故、千萬人の笑罵を恐れず、一代の指嘲を意とせず、自ら信じたる主義の爲めに、奮勵活動して止まざるなり、其勢怒濤の中に立てる巖石の如く、暗夜の燈臺の如し、謙遜の精神かるが故、如何なる田夫漁夫をもあなどらず、愚癡無智のものを賤しめず、貧者賤者を退けず、進でこれらの人の友となり兄弟となり、父となり師となり、誘導感化するなり、宗教家は此二面の性質あるが故、碩學鴻儒に交ると同じく無智無才の人と交るなり、王公貴紳を導くと

同じく農夫漁夫を導くなり、富者を教ると同じく貧者を教るなり、宗教家は精神上に於ける社會主義を實行するものゝ社會を循環せる血液と云ふべきもの、  
 一方には理想の光明を自己の胸臆にやどし、一方には自己の不完全をさとる、是れ真人の真人たる所以、されど見上滔々たる世人、下るものは卑屈となり、自暴自棄となり、一點だも理想の光明をみとめざるに至る、上るものは高慢となり、獨尊となり、自己の不完全をさとらざるによる、これ人間社會にありがちの通患なり、此に於てか真人は多衆の聲を聞き社會の輿論に従ふ能はず、クロンウエル臨終に際し、斷續せる言語を以て神に祈て曰く、

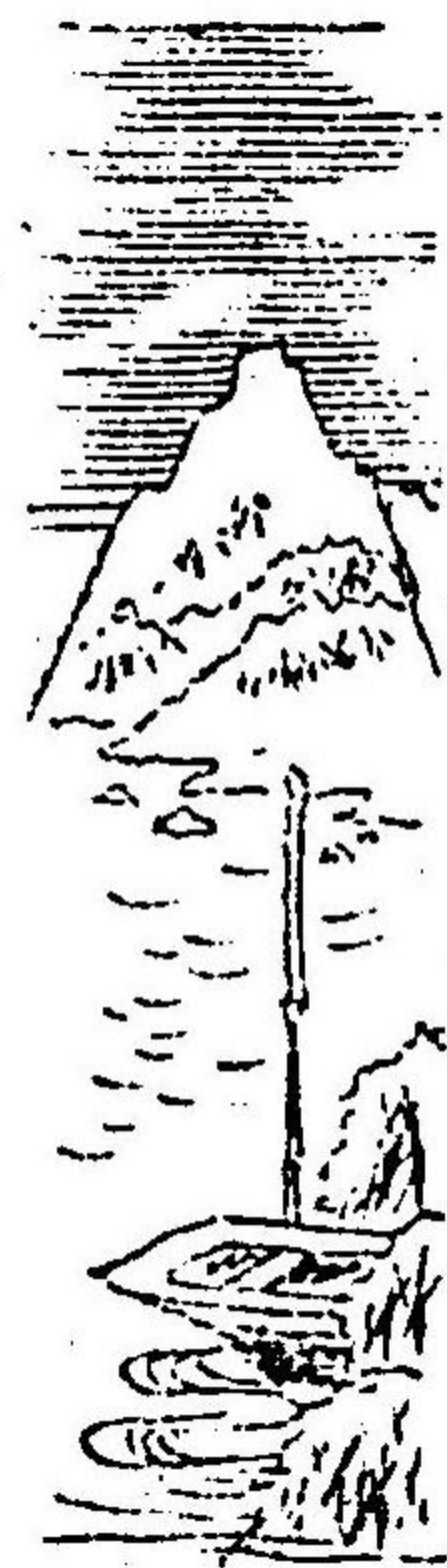
That He would judge him and his cause, He since man couldnot, in justice, of in pity.

(神は吾人及び吾人の事業を裁斷し玉ふべし、人は公正に於てまた



同情を以て裁断し能はざる故、神は………)

真人の精神は實に此の如し、此精神は自己の偉人をみとむると同時に、自己の不完全をみとむるものなり、こは眞宗に云ふ所の機法二種の深信に該當するものなり、盡十方無碍の光明は宿て我胸中にあり、自己豈に輕からんや、されど自己は一個不完全の凡夫なり、此に於てか謙遜虚懐、唯だ大法の使者として活動せざるべからざるなり、



其十。自然道德

あさみどり、野邊のかすみは、つゝめども、

こぼれて匂ふ、花さかりかな、

畫工にして終始規則に束縛せらるゝものは、其畫は法に適ふと雖、精神の其中に存するあるなし、天才を養ふに於ても、亦鑑すんばあるべからず、

ゲーテ

「桃李不言、自爲蹊」これ自然の數なり、桃李花さく處、自然人に知らるゝ如く、自己心内に正大公明の理想あり、主義あらば、其言語に發する所、其行動にあらはるゝ所、自ら道德的たらざるを得ざるなり、吾人嘗てさく、不良の少年を匡正せんとするにあたり、規則を以て束縛するも、賞罰を以て之を勸戒するも、到底其効を奏するを得ず、唯だ一片あたゝかき同情心よりして、知らずくの間、之を感化するを得べしと、これ豈に不良



の少年を匡正するのみの方法ならんや、家族に對するも友人に對するも社會に對するも、皆なこの暖き同情心よりして行動せざるべからざるなり、否他人に對しては規則賞罰の有効ならざるのみにあらず、自己に對して亦有効ならざるなり、

吾人の行爲を規制するに二の方法あり、一は自然内部より發露するものにして、一は外部より規制するものこれなり、固より尅實して之を論ずるときは、内外兩方相待たざるべからずと雖、實際上何れかを主とせざるを得ず、若し外部の規制を主とするときは、やゝもすれば非自然に墜り偽善に墜るをまぬがれず、よし此弊を除けたりとするも、其結果、ムロザキの梅花の如し、彼の陽春三月自然の温氣により、荷香かんばしくひらく處の梅花に比すべからざるなり、之に反して自己の精神を清淨にし、公明正大の信仰主義と一致するをつとめば、其言動の如きは、自ら慮り自ら省み、自然裡に高潔たるを得べきなり、

或人は云く衣食足て禮節を知る、故に先づ衣食を得るの方法を考案して働けど、これ儘に一面の眞理なり、然しこは口に唯だ仁義道德を吐き、現在如何にして生活すべきかを知らざる、愚者をいましむる箴言なり、されど一般の法則となすを得ず、何となれば衣食充足する人にして、禮節を知る人あり、禮節を知らざる人あり、衣食足らざる人にして、禮節を知る人あり、禮節を知らざる人あり、今日世間を通觀するに衣食の充足せる人よりも、却て衣食の充足せざる人に禮節を知るもの多きをみる、故に此言は一般として正當なるものにあらず、吾人の信する所によれば、人は自己の生命を保存せんがためには、必ず衣食を要す、此衣食を得んがためには誠實と才智と勤勉に依るべし、決して詐欺僥倖を頼むべからざるなり、これ衣食を得るの道なり、衣食を得て後にのみ禮節あるにあらず、衣食を得るにも禮節あるなり、故に吾人は吾人の行爲を指導する所のものを、先づ心に悟得せざるべからざるなり、



或人は云く名譽利益權勢を得るがために、行爲を規制するの必要ありと、今の紳士と稱せられ紳商と稱せられ、幅きと稱せられ才子と稱せらるゝ人の行爲を規制せんとする動機は全く此處にあり、かゝる外部の結果を豫想して、その行爲を規制せんとするは、恰も、インツツア物語にある孔雀を真似たる鳥の所行に似たりと云ふべし、孔雀の采羽を飾りたればとて、鳥豈に孔雀となるを得んや、若し世人の所謂名譽利益權勢を得んがために、其行爲を規制せんとせんか、名譽を得利益を得權勢を得らるゝならば、如何なる行爲をもなすに至るべし、然るに今日の社會の組織は到底不完全をせぬが故に、誠實なる道德的行爲よりも、巧妙なる權謀術數は、論者の所謂結果を得るに近からん、さらば外面は道德をかざり内面は詭詐を逞ふするに至るべし、今日風俗の頹廢するに云ふも、人情の輕薄なりと云ふも、一般の人心にかゝる謬想の横るを以てなり、自利主義の道德や功利主義の道德は、唯に此謬想を打破す

る能はざるのみならず、炎々たる烈火に油を注ぐと同一なり、其病弊ますます、高まるのみ、嗚呼單に外部の利益幸福を目的として、其行爲を規制せんとするは、人をして表裏反對偽善虚飾のものとならしむるのみ、然らば即ち真正に吾人を規制するものは何なるか、自己の中心に於て仁愛と正義の、人類自然の大道たるを自覺し、よし社會は溷濁をさわめ人民は腐敗につゝまるも、唯だこれのみによりて人類は完全の域に進み、これのみによりて人類は進化するものなることを信じ、自然大道の使者となりて、自己の不幸苦痛を恐れざる勇氣ある人にして、始て完全に吾人の行爲を規制することを得べし、夫れ達人の言は、常人の耳に入らず、却て嘲弄せらるゝことあり、基督嘗て嘆息して曰く、空と云ふ鳥には巢あり、走る獸には穴あり、されど人の子には家なしと、こ真人のれ時に預期せざるべからざる運命なり、されど好んで俗に逆ひ世に反するが如きは、これまた一種の迷謬なり、真人の世に處し人を導くや、慈父の嚴



と慈母の愛を以てすべきものにして、懇々切々訓へ導き、助け憫れみ、漸々に曲れるを正し、愚なるを明ならしめ、未熟を成熟せしむべきものなり、決して偉人を氣取り、達人を自任し、超然標擧して世に背くが如きは、寧ろ似て非なるものなり、師親鸞晚年關東を辭して東北に歸らんとするや、日常親愛せる信者に別るゝに忍びず、歌ふて曰く、

病む子をば、あつけて歸る、旅のそら、

心はあとに、のこりこそすれ、

これ誠に宗教的真人の胸臆をあらはすものと云ふべし、されど世の濁濁はびこり、到底真人の言を聞かず、否なきかざるのみならず、之を迫害し、之を壓倒せずんば止まざらんとするに至り、真人たるもの、猛然として進み、宇宙の大道のため、如何なる艱難苦痛をも辭せざるなり、此の如きは、決して外部の規定により得らるべきものにあらず、眞個に宇宙の大道を自覺するより出で來らざるべからざるなり、これを自然道德と

云ふ、

此の如きは、決して外部の規定により得らるべきものにあらず、眞個に宇宙の大道を自覺するより出で來らざるべからざるなり、これを自然道德と云ふ、





其十一。生存競争と宗教

衆生常雖得安樂、而不知修安樂因、

涅槃經

各曼強健時、努力勤修善、

佛說大無量壽經

社會の進歩と共に生存競争愈々激甚に趣くものなり、智者の前には愚者の頭をめぐるを得ず、勤勉者の前には怠惰家は歩を譲らざるを得ず、精巧なる工學的利器の前には粗雑なる従來の器具は、顔色を失はざるを得ず、その他萬事萬端みな然り、社會の進歩は、智識の上進を意味し、勤勉を意味し、便利を意味し、道德の發達を意味し、若し此際にあたり智識の養成につとめざるもの、怠惰なるもの、如きは、直に競争場裡に失敗し、滅亡の谷に沈淪するの不幸を見ざるを得ざるなり、かゝるものは何れの社會にも固より見捨らるべきものなれども、進歩せる社會に在ては、尤も迅速に尤も激烈に其不幸を蒙らすものなり、従來の社會に五時

間勞動して生存し得たるものは、今日の社會に在ては八時間勞動せざれば生存し得ざるなり、従來の社會に十の智識にて事足れるものは、今日の社會にては二十の智識を得ざれば事足らざるなり、若しかゝることをなし得ずと云はんか、零落滅亡の運命をまぬかるゝ能はず、社會の進歩は殘酷なり涙なきなり、此處に於て人々學生の勇を振ふて生存競争に従事せざるを得ず、生存競争激烈を加へるに従ひ、自然の勢として他を排擠し、己れ立たんとするに至る、詐欺姦黷自然起らざるを得ず、文明の弊は此處にあり、文明の弱點は此處にあり、文明の疾病は此處にあり、文明の害毒は此處にあり、されどこは長所あれば短所あると同く、文明に此短所あれば、として其長所を併せ棄るを許さず、文明を喜ばざるものは社會の進歩人類の進歩を喜ばざるものなり、天地の法則を無視するものなり、然らば文明の弊害を如何して可なるか、水を融解するものは、温暖ならずや、摩擦を滑にするものは、油ならずや、



文明の弊毒を救ふものは、愛の福音なり、慈悲の法音なり、換言すれば宗教なり、宗教は如何してかゝる力を有するや、これ行爲の本源たる動機を一轉するに依る、吾人は何故に生存するか、何故に種々の行動をなすが、これ自己の快樂を恣にするためにあらず、自己の威福を逞するためにあらず、自己の本務を盡さんがためなり、智識をみかくも本務をつくさんかためなり、徳ををさむるも本務を全ふせんがためなり、勤勉労働するも本務を全ふせんがためなり、人としての本務を全せんがために活動すべきものとすれば、排擠相陥の弊、此に除却するを得べきなり、即ち強者は弱者をたすけ、弱者は強者に従がひ、智あるものは教へ、不智なるものは聞き、才あるものは才を働かし、體力あるものは體力を働かし、剛柔相依り、智愚相助け、以て健全なる純潔なる社會を組成するを得べきなり、假令全然斯の如くなる能はざるも、之れに近接せしむることを得べし、今日世は唱道する社會主義をして有効ならしめんと欲せば、先

づ一般國民に此主義の大精神を會得せしむるを要す、此主義の大精神とは、即ち吾人の所謂宗教ならざるべからざるなり、人は云ふ、宗教は農夫の如き無智と閑暇を有する人に必要なり、智識と多事なる人にとりては不必要なりと、嗚呼何ぞあやまれるの甚しき、人は多忙なれば多忙なる程胸中に餘裕を要するなり、活動が盛なれば盛なる程、其活動をして正大公明ならしむ信仰主義を要するものなり、信仰主義なきの活動は、盲目の猛進にひとし、危険云ふべからず、故に社會複雑となり、人事煩繁となり、生存競争益々激甚を加ふるに至ては、健全なる宗教の必要は大早の雲霓も唯ならざるなり、

ア  
ニ  
ヤ  
ヤ  
ヤ





其十二。吾人の佛教(實相論なり)

鳶飛戾天、魚躍于淵、

有爲空無爲空、畢竟空、

詩 經

龍 樹

行亦禪、坐亦禪、語默動靜體安然、縱遇鋒刃常坦々、假饒毒藥也開々、

永 嘉

佛教宗派の多きこと幾十百、其經論著述の多きこと幾百千、其間思想の發達變遷、信仰の清濁優劣、決して一樣ならざるなり、人の始めて佛教を伺ふもの、恰も岸頭に立て大洋を望む如く、茫として如何にすべきやを知らず、漸く其内部に入りて之を研究せば、大乘あり小乘あり、顯教あり密教あり、聖道門あり淨土門あり、權教あり實教あり、蘭菊美を競ひ桃李麗を争ひ、人をして其何れに適從す可やに苦ましむ、此處に於て人各自己の理性感情に適する所のものをとり、其依憑となすに至る、吾人は佛

教を學ぶこと殆んど十年、固より未だ知らざるもの多しと雖、其知り得たる範圍内に於て、聊か依憑せんと欲する所のものなきにあらざるなり、吾人の佛教と題する所以此處にあり、古來佛教を大判して實相論緣起論の二方面となせり、實相論は空間的の觀察にして、物に就て其本質現象法則關係等を説明するものなり、三論天台禪の諸宗之に屬す、緣起論は時間的の觀察にして、物の發達の狀態法則を説明するものなり、俱舍唯識華嚴之に屬す、然し今ま此に吾人のとる所の實相論と云ふは、前に陳述せる空間的研究時間的研究の一方を指すものにあらず、二者を總合して之を實相論と名けたるなり、何となれば空間的研究の物の實相をあらはすと、同く時間的研究もまた物の實相をあらはすを以て、一方は空間的實相と云ふべく、一方は時間的實相と云べし、されば二者を總合して始めて眞の實相論たるなり、また天台三論の實相論は靜的なり、靜想寂觀其まゝ法の實相と一致す



ることを要とするものにして、人をして前途の希望目的活動を起さしむる能はず、浄土宗眞宗の如きは、未來に理想世界を建立し、之に向て進趣せしむるは動的なり、されど其理想世界たるや極めて茫焉たるものあり、吾人の此處に云ふ所の實相論なるものは、動的靜的一方に偏せず、現實理想一方に僻せず、現實中に理想を求め理想中に現實を立てんとするものなり、乞ふこれより吾人の實相論を論明せん、此實相を説明するに、便利上眞俗二諦に分つべし、眞諦より云へば、山も川も日も月も人も獸も、華嚴の所謂不思議にして法華の所謂妙なり、日月の輝く所以、晝夜の交替する所以、山高く水長き所以、花紅柳綠なる所以、皆な妙不思議にあらざるなきなり、世人は科學に依て研究し哲學に依て思案すと雖、其結局は妙不思議と云ふより他の言辭なきなり、此場合に於ては善ども云ふべからず、惡ども云ふべからず、苦ども云べからず、樂ども云ふべからず、美ども云ふべからず、醜ども云ふべからず、唯だ自然なり、妙なり、不

思議なり、龍樹の「空」と云ふも、王陽明の「虚」と云ふも、カントの「物其物」と云ふも、「スピノザ」の本體も、婆羅門の「梵」も、老子の「玄」も、皆之を云ふものなり、理智冥合すと云ひ、或は絶待と一致すと云ふも、宇宙の神秘恍として吾人の意識に閃きたる状態を云ふものにあらざるを云ふや、科學者が杳遠の星晨を觀察し、宵深の海底を測討し、原子の微より太陽系の大迄を究め、星雲の昔より太陽系破壊の未來迄を考へ、揚々として科學の力の偉大なるをはこる、恰も無限の神秘海中に入りて、蟹や蝦魚を捕ふるの類に過ぎず、哲學は頻りに思案を逞して宇宙の第一原理を談するも、其の多くは群盲象を評するの類にあらざるを知らん、世人の見て以て通常の事にして、少しも怪むに足らずとなすもの、皆これ實に妙不思議ならざるなし、天台家に曰く、

一色一香無非中道、

華嚴經に云く、



奇哉々々、一切衆生、悉具如來智德相、  
 禪家に云く、

喫茶喫飯是佛事。

吾人若し此の宇宙の妙不可思議に默識神會することを得ば、恰も自己の胸裡は秋天の明月の如く深潭の寂水の如く一塵一雲の障るものなく、生死我に於て何かあらん、毀譽褒貶我に於て何かあらん、心を大虚に同して我を煩すものなし、吾人は祐梅禪師ならざるも、白刃の下猶春風影裡斬電光を歌はれんのみ、是れ吾人の眞諦なり、次に俗諦より云へば山は高きなり河は流るゝなり鳥は歌ふなり花は咲ふなり、諸法は因縁に隨はざるべからざるなり、一個の種子之を地に下し、雨露水土温氣の因縁和合せば、此に根をふき芽を生じ、生長して二葉となり、更に進で枝葉繁茂し根幹堅大たるに至れり、花をひらき實を結ぶ、而して遂に枯却するに至るなり、一大陽系に見るも此の如く、一地球に見るも此の如く、

一生物界にみるも此の如く、一動物界に見るも此の如く、一人類に見るも此の如く、一個人に見るも此の如し、是れ宇宙の理なり、自然の道なり、若し種子に目的ありと云はゞ、宇宙にも人類にも個人にも目的あるなり、器械論と目的論と相争ふて止まざるも、靜に一個の種子に就て觀察せよ、種子は温暖濕氣陸等適當せざれば、發芽する能はざるのみならず、往々死滅し去るに至る、若し諸般の關係にして其宜しきを得ば遂に發芽、生長するに至るなり、種子の死滅するも發芽生長するも、皆其然るべき理法の下に然るものにして、何れも怪むを要せざるなり、されど種子其物より云へば、死滅するは逆にして發芽生長するは其順なるものなり、種子中に諸般の關係其宜しきを得ば、發芽生長すべき力を有するは、これ争ふべからざるの事實なり、これを器械的動作と云ふも、果た目的を有すと云ふも、唯だ名稱上の論議にして、此の如き事實に、或る符號を付せんとする符號の議論のみ、器械的動作と云ふも不可なし、されど其



器械的動作の中に、一定の發達變遷の法則を具したりとせば、それを目的を有すると云ふもまた不可なし、要は唯だ事實の真相を知るのみ、宇宙に目的あるや、否やの議論も此の如く、人類に目的あるや否やの議論も此の如く、個人に目的あるや否やの議論も此の如し、今や個人上より之を立論するに、個人は一個の種子の如く、適當の營養に依て、身體は生長發達し、教育と修養に於て精神は開發し、智も情も意志も調和を保て完全に發達するものなり、此の如く個人はある關係の下に心身共に生長發達すべき力を有するものなり、固より其關係宜きを得ざれば、心身共に枯却し去るを免れず、これまた自然の理法なりと雖、個人より云へば、これ逆にして順にあらず、去れば個人として取るべき道は、諸般の關係其宜しきを得せしめ、心身をして能く健全に調和的に發達完備せしむるにあり、身體をして發達せしめんとせば、衛生生理の學に依らざるべからず、精神を發達せしめんとせば、科學哲學文學宗教に依らざるべからず、斯くこれら諸般の指導に隨て心身を完全に發達せしめざるべからざるなり、而して個人なるものは、個人として獨立に存在するものにあらず、家庭の一員として、國家の一員として、人類の一員として、萬有界の一員として、存在するものなれば、家庭の一員となりては如何すべきや、國家の一員として如何すべきや、人類の一員として如何すべきや、萬有界に對しては如何すべきを究明し、之に處して其宜しきを得ざるべからざるなり、更に時間上より之を觀察すれば、吾人は現在百年間生存を全ふせば、此處に足れりと云ふのみにあらず、過去遠々よりの繼續をなし、未遠遠々に向て之を遺すものなれば、之に處する責任を全うせざるべからざるなり、これ俗諦なり、此眞俗二諦を全うしたるもの、即ち吾人の實相論なり、此眞俗二諦は、一見背反するが如しと雖、其實相背反するものにあらず、俗諦因縁の理法に従ひつゝ、眞諦の理を認むべきものなり、眞諦は靜的なり、俗諦は動的なり、眞諦は現實の外理想を要せ

らず、斯くこれら諸般の指導に隨て心身を完全に發達せしめざるべからざるなり、而して個人なるものは、個人として獨立に存在するものにあらず、家庭の一員として、國家の一員として、人類の一員として、萬有界の一員として、存在するものなれば、家庭の一員となりては如何すべきや、國家の一員として如何すべきや、人類の一員として如何すべきや、萬有界に對しては如何すべきを究明し、之に處して其宜しきを得ざるべからざるなり、更に時間上より之を觀察すれば、吾人は現在百年間生存を全ふせば、此處に足れりと云ふのみにあらず、過去遠々よりの繼續をなし、未遠遠々に向て之を遺すものなれば、之に處する責任を全うせざるべからざるなり、これ俗諦なり、此眞俗二諦を全うしたるもの、即ち吾人の實相論なり、此眞俗二諦は、一見背反するが如しと雖、其實相背反するものにあらず、俗諦因縁の理法に従ひつゝ、眞諦の理を認むべきものなり、眞諦は靜的なり、俗諦は動的なり、眞諦は現實の外理想を要せ



す、俗諦は理想を要するなり、斯く如くなれば一見矛盾するが如しと雖、  
其實二者渾然融通調和して行はるゝものなり、



其十三。吾人の佛教(因果必然なり)

天道自然、不得差迭、

佛教大無量壽經

己打人人亦打己、己怨人人亦怨己、讒謗必來、讒謗、忿怒必來、忿怒、

沙門經

因果必然と云ふことは、獨り物質界に行はるゝのみならず、また精神界  
にも行はるゝものなり、獨り自然界に行はるゝのみならず、また人事界  
にも行はるゝものなり、宗教も倫理も皆な必然に支配せらるゝものな  
り、吾人の佛教は萬事萬物に、向て因果必然を談ずる者なり、古來佛教に  
於て今日吾人の一舉一動を以て過去宿業の致す所となし、貧窮なるは  
貪欲の報なりと云ひ、愚癡は才智に矜りし報なりと云ひ、其他種々のこ  
とを談じ、其あまりに羅織構造的なる、人をして首肯せしめ難きものあ  
りと雖、其精神とする所は、この因果必然と云ふこと其根底たり、吾人は







なり、

論者或は云はん、善惡何れをもなし得られながら、惡をなすが故、道德上の罪を構成するなり、必然的に惡をなさざるべからざる如くに作られたる人、惡をなしたればとて何の惡かあらん、若し人欄干に縛せられ居らんには、河に墜ちたる小兒を救助せざりしとて、之を道德上より非難すること能はざる如きにあらずや、これ自由意志の必要なる所以なりと、此一論據は古來幾多の學者をあやまらし、今日猶ほ幾多の人をあやまらせつゝあり、この論據は一應尤もと云はざるべからざなり、されどこれは理論の鋭鋒に敵しかね、實際の翼下に隠るゝものにあらずや、されど吾人は敢て勇氣なき追迫をなさざるべし、唯だ必然論によりて道德の成立することを述べ、自由意志論に依て道德の成立をなし得ざることを述べんのみ、吾人が善をなすも必然なり、惡をなすも必然なり、吾人が善を好み善を賞するも必然なり、惡をたくみ惡を罰するも必然なり、

善惡因果は皆必然の理法の然らしむるものとせば、緯々として道德は成立するにあらずや、之に反して自由意志なりとせば、教育も制裁も全然無効に歸するものにあらずや、教育を施せばとて自由意志なれば、何の効力もなかるべきなり、制裁を加へたればとて自由意志なれば、何の効力もなかるべきなり、若し果して然らば道德は到底成立する能はざるにあらずや、然るに社會の状態を通觀するに、小學中學に於て倫理教育あり、師範學校に倫理教育あり、青年子弟の品性を陶冶し、幾分なりとも其効を奏しつゝあり、社會には道德的制裁あり、惡人の放恣を防ぎ善人の擁護をなす、幾分其効を奏しつゝあり、是に依て之を見るも自由意志ならずして因果必然なることは、明々白々疑ふべからざるなり、彼の本體論上より自由意志の説明をなすが如きは、一場の夢物語にして、現實の世界に決して有り得べからざることなり、如何に巧妙に論議するも、白霜を烈火に近ける如く、吾人の道德上何等の裨益する所のものあり、



らず、されば吾人は徹頭徹尾因果必然なることを主張し、また因果必然によりて道德の成立することを信するものなり、吾人の佛教は物質界に於ても精神界に於ても、因果必然を信するものなり、道德上の理想、美術上の理想と稱する理想の如きは、一見因果必然と反するが如く思ふべし、なれども、尅實すれば其理想なるものも因果必然の理法の下に支配せらるゝものなり、其理想の起るや、起らざるべからざる理ありて起り、突然無より湧出したるものにあらず、其理想を實現せんこと勤むること、勤めざるべからざる理ありて勤むるものなり、人或は因果必然ならば理想の必要なしと思ふものあらんも、理想は因果必然より起るなり、吾人をして實現せしめんとつとめしむるものなれば、吾人は此理想に従ふべきものなり、之を要するに吾人は全然因果必然の下にあり、善を行ひ惡を去り、理想を欲求する、皆これ因果必然なり、之に反對することも因果必然なり、靜に宇宙を大觀すれば唯だ因

果の活動と云ふべきのみ、





其十四。吾人の佛教(無我なり)

於諸衆生、視若自己、

佛教大無量壽經

凡そ物を有用若くは美麗ならしめんと欲せば、個人の精神を棄て、天地の大精神に服せざるべからず

エマルソン

「坐禪せば四條五條の橋の上」とは、誠に妙味ある言にあらずや、深山幽谷にのがれて樹下の石上に座し、限りなきみそらにたいよふ雲をみながら、沈思冥想せんか、境閑に心靜に、胸裡得る處少なからざるべし、さりながら樹下石上の境のみを以て至極とせば、これ大なる誤なり、往來頻繁車馬絡繹、吼ゆるが如き中に立て、法を觀ずるは達人のなす處なり、牙籌を手にして商業にいそかはしき店頭も、以て修養の境となるべく、黒煙みなざり輪機の響器々たる工場も、修養の境となるべく、其他如何なる所も、修養の境となし得る人にあらざれば、未だ真正の修養を積む人

と云ふことを得ざるなり、閑境には修養し得べきも、忙境には修養し得ずと云ふ人あらんか、此人は未だ真正の修養を知らざる人なり、真正の修養なるものは、如何なる處も修養の處にして、如何なる時も修養の時たらざるべからざるなり、坐禪せば四條五條の橋の上」とは、即ち隱遁に偏したる人を誡むるの金鍼と云ふべし、一切の境を修養の境となし、一切の時を修養の時となす人は、煩惱を離れ執着を離れたる人なり、此煩惱を離れ執着を離るゝが無我なり、

古來歴史上にあらはれたる偉人なるものは、一時代一境遇のものにあらず、楠正成は後醍醐天皇時代のみにあらず、明治の今日にあらしめば、今日の偉人たることを得、孔明は支那三國時代のみ、俊傑にあらず、今日にうまれしめば、今日の俊傑たるなり、ワシントン、米國のみにあらず、義人なりしにあらず、日本に生れしめば、日本の義人たりしなり、佐久間象山は日本に於てのみ卓眼たりしにあらず、英國に生



れしむるも、卓眼家たりしなり、偉人は時と處の異なるに順じて、其形式と活動を變更するも、其英靈潑々たる精神は一故に古の偉人をして今にあらしめば今の偉人たるを得、今の偉人をして古にあらしめば古の偉人たるを得、西人の偉人をして東洋にあらしむれば東洋の偉人たるを得、東洋の偉人をして西洋にあらしむれば西洋の偉人たるを得、此英靈の精神は無我の精神なり、無我とは煩惱と執着を離れ、爲すべきことを爲すの精神なり、

富貴に處しては富貴を行ひ、貧賤に處しては貧賤を行ひ、文明に處しては文明を行ひ、夷狄に處しては夷狄を行ひ、商業家となりては商業を行ひ、工業家となりては工業を行ひ、政治家となりては政治を行ひ、文學家となりては文學を行ひ、如何なる位置に處し、如何なる職業を行ふも、容れざるなきは無我の精神なり、

上來陳述し來れる如く、吾人の所謂無我は自己意識を滅却することを

云ふものならず、また山水の美に打たれて恍惚たるが如きことを云ふものにならず、煩惱と執着をはなれ、時處位の關係に隨ひ、なすべきことをなすの精神を云ふ、孔明は南陽の草廬にありて一農たりしときも、煩惱と執着なかりし、帝師となり宰相となりしときも、煩惱と執着なかりし、窮通泰否の外に、別に朗然たるものあり、これ無我の精神なり、ワシントンが大統領たりしときも、煩惱執着なく、閑村に退て餘生を送りしときも、煩惱執着なかりし、唯だなすべしと信じたることをなせしのみ、大徳の一禪僧他國に漂遊し、傭れてある家の子守をなせり、後知人ありて大に驚き大寺の住職たらんことを乞ふ、左様カーの一言のみ、小に當れば小をなし、大に當れば大をなし、悠然としてなすべきことをなすもの、是れ無我の人なり、

そもく、佛教に人法二無我と云へることあり、各宗の先哲之を議すること一ならず、されど今は吾人のとる處のものを述べし、人空とは自



己執著を空して自然の法と一致せしむることなり、若し障碍なきときは、眼は赤色を赤色とみ、白色を白色とみる、耳は楽音を楽音と聞き、雑音を雑音と聞き、是れ自然と一致せるなり、大なるものを大と云ひ、小なるものを小と云ひ、善なるを善と云ひ、悪なるを悪と云ふ、是れ自然と一致せるなり、ありのままなるは人空なり、然るに自己を曲庇せんとして赤を白と云ひ、黒を青と云ひ、曲を直と云ひ、直を曲と云ふが如きは、これ人執なり、人執は自然なり、大人は赤子の心の如しとは、人空無我を云ふものなり、法空とは諸法を没して妙不可思議に歸するものなり、諸法の神秘なるは今も昔も一なり、今人は神秘の状態に種々多様の名稱を附せし、の相違あるのみ、吾人は人執をして空ならしむることを望み、また法の妙不可思議なることを信するものなり、科學哲學は此妙不可思議の幾分を研究し、是に名稱を附す、其實は言語道斷心行所滅の境界なり、之を要するに、真正の無我の人たることを得るは、決して偶然此處に至らざるべからざるなり、

るゝものにあらず、信仰の根底と修養の錬磨によらざるべからず、即ち人法二空を了し、大に修養を積み、自然に無我の行動に出づる如くならざるべからざるなり、





其十五。吾人の佛教(慈悲なり)

佛心者、大慈悲是也。

佛說觀無量壽經

生命は愛なり、生命の生命は神氣なり、

ゲータ

人類は人類として有せざるべからざるもの二あり、一は正義二は慈悲なり、正義と云ふは目にて目を償ひ齒にて齒を償ふことなり、二の勞働をするものは二の報酬を受けざるべからず、三の勞働するものは三の報酬を受けざるべからず、力あるものは強く、力なきものは弱く、勤勞するものは罰せられ、怠惰なるものは罰せらる、これ皆な正義なり、正義は權利義務なり、法律は正義によりて成立するものなり、若し人類にして正義の觀念なからんか、規律もなく、秩序もなく、混沌亂雜底止する所を知らざるべし、幸に正義の觀念ありて物各々其所を得、規律あり順序あり、此處に始て整然たることを得るなり、されど正義には同情なし涙な

し、純粹の器械力と同きなり、身體健康にして勞働する人は、相當の報酬を得安穩なる生活をなすことを得べし、されど身牀怯弱にして勞働に堪へざる人は、報酬を得るに途なく、永く困難の域に沈まざるべからず、されど正義は之を當然なりとして少も怪まざるなり、其家の子弟は完全なる教育を受け、立派なる人物となることを得、貧民無告の子弟は、管て教育を受けたることもなく、悲しき境遇に生長し、遂には遂に悪人となり、刑罰に處せらるゝに至る、正義は之を當然なりとして少しも怪まざるなり、正義のなす所は實に斯の如し、正義のみによらば世は「サワラ」の沙漠よりも猶ほ乾燥なり、生存競争は、餓虎の肉を争ふよりも猶ほ猛烈ならざるべからざるなり、其残酷なること暴君の刑罰の如くならざるべからざるなり、此の如くして以て社會は成立することを得べからず、此社會に於て同情あり涙あり、弱きものを憫み、貧しきものを助け、あやまれるものを教へ、まがれるものを導き、家族的愛をあらはし、正義の



なす能はざる所のものをなすは慈悲なり、人間の人間として尤も靈なる所以のものは、此慈悲にあるなり、佛教の生命は慈悲にあり、佛教より若し慈悲を除却し去らんか、其他種々の教理儀式ありと雖、生命なきの死骸にして少しも用をなすに足らず、慈悲の生命ありて種々の活動をなすことを得、今日の社會組織は、正義を根底として立ちたるものなれども、今後の理想的社會は慈悲を根底として立つものならざるべからざるなり、會社組織の如くならずして、家族組織ならざるべからず、惡をなさずと云ふよりは善をなすを以て主とせざるべからず、他人を害せずと言ふよりは他人を利するを主とせざるべからず、富者は貧者を助け、智者は愚者を導き、一家に於ける兄弟姉妹の互に相助るが如くならざるべからず、理想的社會の根底は慈悲にあり、近世の社會主義の基礎は慈悲にあり、換言すれば暗々裡に宗教の光明に離れつゝあるものなり、極樂と云ひ天國と云ひ、真人の理想境の状態なり、こゝにも慈悲を以

て根底とせることを見るべし、

世界の歴史を見よ、釋迦世尊は「佛心者大慈悲是也」と云ひしにあらすや、基督は愛神愛人の愛を説けるにあらすや、孔子は仁を以て徳の最上として説けるにあらすや、これ其名異れりと雖、其實は一なり、世上うるはしきもの多しと雖、慈悲程うるはしきものなし、これ佛心なり、人心の精美なり、闇黒の光明なり、砂漠の綠島なり、慈悲ありて人類始て靈なる生命を有すると云ふべきものなり、





## 其十六。吾人の佛教(理想的)最上の人格なり)

彼佛光明無量照十方國無所障礙是故號爲阿彌陀、又舍利弗、彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫、名阿彌陀、佛說阿彌陀經

吾人は眞宗の家に生れ、眞宗の家庭に生長し、また修學中直接に間接に眞宗の教義をきくこと多年、思ふに種々の人物より學說より境遇より感化を受けたりと雖、眞宗の氣風及び教義は、其尤も感化を受けしものならんと信するなり、吾人は年と共に思想感情種々に變化せしを以て、眞宗に對する考察一ならずと雖、現在は斯の如く思ふ、人は師とすべき理想とすべき人物を求めて之にならばざるべからず、道理をきく之を行はんこと固より必要なりと雖、其道理を實現せし人物は、尤も眞摯に深遠に感化影響を與ふるものなり、道理はかくくとなりと道案内をなすもの、偉人はまさに其の實際の眞狀を目撃せしむるもの、古來歴史上

に於ける東西古今の偉人は、基督と云ひ孔子と云ひ、ソクラテスと云ひ、王陽明と云ひ、ワシントンと云ひ、グラッストーンと云ひ、楠正成と云ひ、吉田松蔭と云ひ、皆な偉大深遠なる教訓を垂るゝ者なり、吾人の之に比り之に學ぶべきものは決して少なからず、此世界の事業、此世界の美事、善行は多く偉人の賜物なり、されど歴史上の偉人なるものは、一長あれば一短あり、一能あれば一不能あり、事業に偉大なるもの必ずしも人物として偉大ならず、技藝に長ずるもの必しも心術に勝れず、精神の純美なるもの必ずしも才智に長せず、ビスマークは手腕の人なれども高尚なる人物と云ふ能はず、グラッストーンは品位のある人物にして内治に長せりと雖、外交の才能は其短とする所、孔子と云ひ、基督と云ひ、其實皆な然らざるなし、されど人類は完全を希望し、圓滿を希望し、至極の眞善美を希望するなり、此處に於てか理想的人物の要あり、此理想的人物に就て人各々見る所を異にすれども、吾人は佛說大無量壽經に説かれ



たる法蔵菩薩の始終を以て、理想的人物の標準となすものなり、佛説大無量壽經は如何なる時代に、何人の手によりて編述せられたるやは今や問ふ所にあらず、また其些々たる事實の如何は今も問ふ所にあらず、其根本の精神と大體の事實に於て、大に吾人に教ゆる所のものあるを覺ゆ、法蔵菩薩とは何んぞや、富貴と權勢に於て世に冠絶せる國王なり、一朝世自在王佛の眞摯なる説法を聞き、非常に感動し、無上正眞道を求めんがために、國の富も王の權も悉く之を棄却し去りて、素朴の沙門となれり、而して世自在王佛の所に於て無上殊勝の願を建立せり、其願に四十八ありと雖、之を要するに、我若し佛陀たるを得ば、苦惱に沈める一切衆生を救済し、理想的國土に引攝し、涅槃の妙樂を得せしめんと云ふにあり、唐の善導は四十八願を評して云く、一一誓願爲衆生故と、實に此言の如く、利他大悲の同情心より溢れ出でたるものなり、彼は此願を成就せんがために、五部の思惟を費し、永劫の修行を勤め、假令身止諸苦毒

中我行精進忍終不悔の大勇猛心を以て、遂に之を成功するに至れり、其修行當時の状態たるや、不生欲、覺、瞋、害、覺、不起欲、想、瞋、害、想、不著色、聲、香味、觸、法、忍力成就、不計衆苦、少欲知足、無染、患、癡、三昧常寂、智慧無礙、無有虛偽諂曲之心、誠に清淨純潔なるものなりき、法蔵菩薩は其願成就して光明無量壽命無量の佛陀たり、光明無量は智慧の無限なることをあらはし、壽命無量は慈悲の無限なることをあらはすものなり、即ち智慧と慈悲の圓滿なる人格が、阿彌陀佛なり、殊に其顯著なるものは慈悲なり、他の諸佛諸菩薩の助け能はざるものを助け、救ひ能はざるものを救はんとするが、彼の本志なり、富者よりも貧者を先にし、賢者よりも愚者を先にし、男子よりも女人を先にするが、彼の目的なり、彼は一言にて言へば子に對する親の慈悲なり、而して衆生の救済せらるゝ、別の條件あるにあらず方法あるにあらず、慈悲に感動し、自己を虚して彼に歸托し、彼の名號を稱ふるにあり、要するに彼の同情に一致するにあり、他語を以

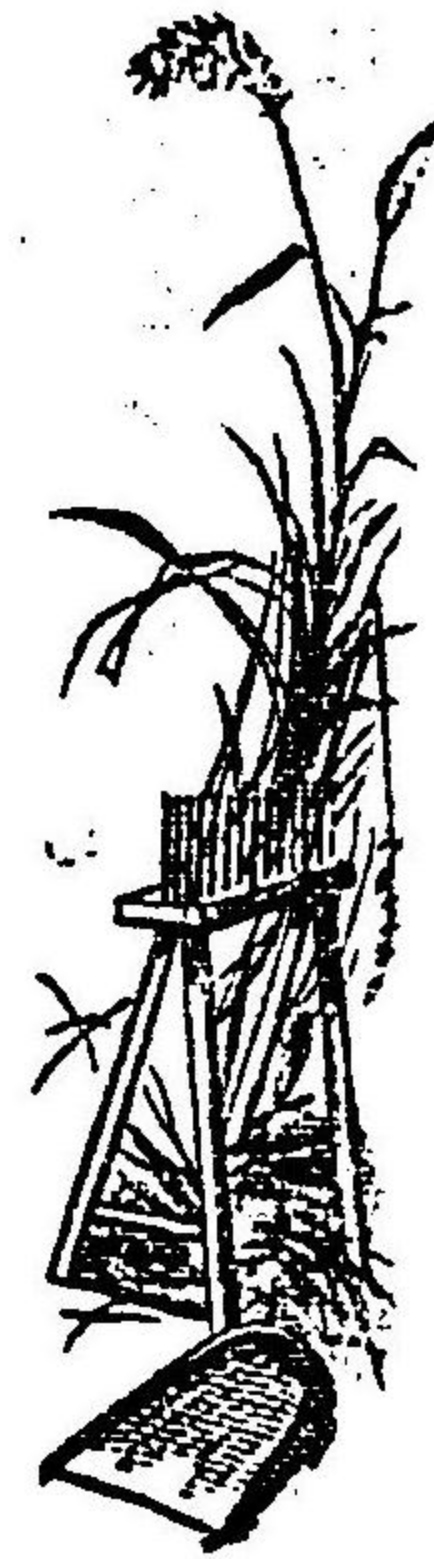


て之を言へば、阿彌陀佛は慈悲を以て世界を同情化せんとするものなり、亦彼の極樂たるや、同一平等にして高下あるなく、常に和樂怡々たり、而して自ら法樂を受くると同時に、如何にして罪惡に蔽はれ、苦惱に沈みたる、哀々たる衆生を救濟せんかを考へ、また救濟に従事するなり、極樂は此世に於けるが如き貧民なく、飢者なく、權威者の放恣なる行爲なく、不義の富を有するものなく、表をかざりて菩薩の如く、内に惡魔の心を有せるものもなく、生存競争のために權謀術數を運すものもなく、仁愛同情の光明は至る所にこりかゝりやき、怡々として自然に自己の本務に従事するなり、嗚呼阿彌陀佛の人格は如何に圓滿にうるはしく、吾人の仰ぐべき理想的人物にあらずや、嗚呼其國土は如何に自由に平和に純潔に高尚にして、吾人の欲求すべき理想的社會にあらずや、佛說大無量壽經の著者は如何なる人なりしと、かくも宇宙の眞生命、人情の至奥を、流麗自在の筆を以て説き來り説き去りて、首尾一貫、理想の大光明を

剛揚せるは、誠にくゞ驚くべき不朽の寶玉と云ふべし、嘗て獨逸の「シルレル」が「ウエルフェルム」の悲哀なる著書を公にするや、其深沈なる感情は、獨逸國民の肺腑を動かし、自己もまた書中の人たるを學び、自殺を計るもの續々生出するに至りしことありしと、されど見よ此佛說大無量壽經の如何に多く人心を感動せしめたるかを、印度支那の幾億萬の人心を動かし、現に日本今日の幾百萬の民心を動しつゝあるにあらずや、吾人も其動されたるものゝ一人なり、吾人願くは法藏の心を以て心となし、彌陀佛と同一の正覺を開かんことを、我等の尊敬する友人中には、彌陀佛を解釋して宇宙の大眞理無限の妙理となすものあり、こは決して不當なるものにあらざるべし、されどあまり漠然として握風捕雲の感なきにあらざるかを恐る、無限の妙理と一致するとは如何なる事にして、如何にして一致すべきか、佛說大無量壽經に教たるものは理にあらずして人格にあらず、斯くならざるべからずと示さずして、斯くくゝな



とせしめり、人間の純美は慈悲にあり、此最上慈悲の人格化は阿彌陀佛なり、慈悲を根底として立てる世界は極樂なり、阿彌陀佛を理想とせる人は、如何なる意を有し如何なることをなすべきか、極樂を理想境とせる人は、此社會に對して何をなすべきか、



### 第十七。 佛教家としての吾人

佛法は心のつまるものめと思へば、しんに御慰に候、

蓮 如

佛法不異世間法、世間法不異佛法、佛法世間法無有雜亂、亦無差別、

華嚴經

分拆的に云ふ所の吾人の佛教の何物たるやは既に明なり、然らば佛教家としての吾人は如何なるものなりや、如何なる行動に出づべきものなるや、是を述べざれば吾人の佛教の全體としての活動を見る能はざるなり、吾人は其まゝ實相なり、而して因果必然の法則に支配せられつつあるものなり、向上的進化の方面に向ふも、向下的退化の方面に向ふも、皆な必然なり、されど吾人の意識は向上進化を欲望して向下退化を忌む、其の狀恰も樹木の日光の方面に枝をのばして、日光に反する方面



にはのばさいらんとするが如し、これまた必然の法則なり、此の向上的進化を全ふするには、理想的最上人格を仰ぎ、之と一致し、其人格を自己に實現せしめんことを期せざるべからず、之を實現せしめんとするには、煩惱と執著をはなれ、其事の小たると大たるとを論せず、其本務を遂行すへきなり、凡て他に對し、社會に對し、行動をなさんとするには、同情慈悲の精神よりせざるべからず、之を以て一身に對すれば、生に樂み死に安じ、之を以て一家に對すれば、和氣洋々として、然も純潔秩序ある家庭を作るべく、之を以て國家に對すれば、國榮の風改まり、正義公道と仁慧博愛によりて、國家を健全にすべく、人類に對すれば、兄弟姉妹の情を以て交り、強者は弱者を助け、智あるものは愚なるものを教へ、相助相依、相互の義務を完ふして、其幸福を増進すべし、是れ誠に實相を悟り、轉迷開悟したる人の活動なり、

附 錄

余の信仰

晉 我 量 深

畏友楠君、其宗教的實驗を録して、一冊子となし、將に世に公にせんことを成りて、其稿を示し、且つ併せて、量深が所感をも介すべきを以てせらる。量深不肯謙なく、謙なし。まして「信仰の告白」と云ふが如き、徒に詭辨を弄して世を欺くべきにあらざれば、再三固辭すれども、君聽がす。遂に卑見を裁して、君に贈る。とさはなしぬ、

一、宇宙と自己

宇宙は壯嚴なり、宇宙は偉大なり、宇宙は靈妙なり、宇宙は優美なり、彼の一面は獨裁の君主の如く、吾人は唯其命を奉じ、禍福吉凶唯彼が欲する所に任せざるべからず、吾人は唯畏敬すべし、唯恐怖すべし、されども



こは宇宙の一面のみ。宇宙は實に我が慈母なり。彼の意志は吾人の意志に適し、彼は常に吾人の感情を知り、吾人の行爲を見、吾人の聲を聞き、吾人を行かんとする所に行かしめ、吾人を達せんと欲する所に達せしむ。彼れ時には吾人を叱せん、而も此れ依然として慈母の聲なり。彼は常に吾人の幸福を祈れり。彼は吾人に生存競争を命せり。然れども彼は弱者を憐めり。彼は樂の苦に勝つ間は生存を命すと雖ども、苦の遂に樂を制せんとするや、彼は直に死を以て此を救済すべし。是故に宇宙の一面には恩あり。他の一面には威あり。彼は敬すべくして又愛すべきなり。

かく云は、人或は疑て曰はむ、汝は宇宙に意志あり、又感情思想ありとするか。曰く否、吾人は決して宇宙の人格を信するものにあらず。吾人の前に説く所は比論のみ。宇宙豈に感情意志あらんや。問題は唯「宇宙は人類を幸福ならしむるものなりや否や」にありて、其此を與ふるを意志する。と否とは、吾人の問ふ所にあらず。かりに此を意志すと定めんも

其意志は公明正大、一に因果的に活動し、一瞬の私情を交へず、是故に彼が見聞すると否と、及び意欲すると否とは、吾人の運命を定むるに於て何等の影響を與ふるものにあらず。

宇宙と人類との關係を論せんと欲せば、先づ人類の幸福より決定せざるべからず。而して所謂人類の幸福とは、決して客觀的福祉を云ふに非ずして、彼の主觀的希望なり。客觀的福祉の如き、是主觀的希望を外にして決定すべきに非ず。希望ありて價值あり。價值ありて善惡あり、苦樂あり、禍福あり。是故に宇宙を、解せんには、先づ人間自然の希望を解せざるべからず。

吾人は金錢を求む。吾人は權力を求む。吾人は名譽を求む。吾人は生命を求む。されども是れ究意の目的にあらず。古來の偉人は凡て是等を捨てたるに非ずや。吾人は自己を解せんを求む。則ち自覺に到達せんを求む。是れ吾人究極の希望なり。自我は常に矛盾の連続なり。吾人の思



想界は常に疑惑を有す。一惑去れば隨て一惑來り、一疑會すれば隨て一疑生ず。吾人心中は爲めに平安なる能はず。吾人は時には單に消極的斷案を以て甘せんとす。曰く世に普通の眞理なし、隨て自我亦あらず、因果の觀念は主觀的迷妄のみと。然れども彼には根本的確信ありて動かすべからず。彼は到底懷疑を以て甘んずべからず。彼は客觀的眞理の存在を信じ、此預件にありて疑惑生せしなり。彼は唯眞實體の何たるやを攻究するの權能を有すれども、決して其存在に向て容喙するの權利なきなり。懷疑は自我ありて來る。懷疑あるは自我あるの證なり。是故に疑は其現象界に向ふ間は是なり。疑あるが故に智起り、智あるが故に隨て疑來る。然れども疑は自我の存在に及ぶべからず。自我は矛盾にありて自滅すべからず。其故に彼は再び懷疑論より醒めざるべからず。彼は再び勇を鼓して進前せざるべからず。矛盾來れば隨て調和し、かくして一步步々矛盾なき自己、即ち統一ある自己に接近し行くなり。然れども自覺

は理想なり。世に自覺の人あるなし。恐くは永久自覺の人なかるべきなり。自覺は吾人の目的なり。吾人は何等かを求めんが爲にあり。自覺に到達せし人は目的を達したる人なり。彼は最早生存の必要なきものなり。彼は精神的食物なき人なり。世豈かゝる人間あらんや。或は自覺の人は利他の爲に生存すと説くものもあるも、利他てふとは則ち自他の矛盾より生せずや。彼は一度自己を念じ、次に他人を觀するや、彼が心は再び矛盾を生じ來れり。彼れ若し眞に自覺に到達せば、何にありて他の爲に動搖せらるゝか。是故に此攪亂は單に他人の所爲に非ずして、彼の猶未だ自覺に到達せざるが爲ならずや。是故に自覺は到底理想なり。自覺して猶生存するは矛盾なり。自覺の境界は涅槃なり。有余涅槃に非ずして無餘涅槃なり。然り而して無餘涅槃の如きは單に理想にして實在にあらず。吾人は唯之れを求め、此に近づく。而して此に進む中間に信するもの確立たるなり。



されば信仰は自覺と混すべからず、信仰は事實なり、信仰は自我を意識的に確信するものなり、信仰以後又疑あり、矛盾あり、彼の解する能はざるものなり、然れども彼の疑は決して自我の存在に及ばざるなり、彼は最早主觀論者たらざるなり、彼の疑は彼の心を苦悶せしめざるなり、彼は斷じて自覺の境を理想としつゝあり、彼は益自覺に近くを信じつゝあるなり、彼は因果法を信せり、矛盾は寧ろ調和の手段なるを信せり、是故に彼は何等の難問に遇ふも躊躇するとなし、是れを解し得ざるの時と雖ども、何時か遂に會し得べきを信せり、是れ則ち確乎として光明を認むるものにして、正に信仰の確立したる人なりとす。

かくの如く自我は常に自覺を求めつゝあり、而も自覺は自我に因果法を有するによりて成立すべき者なり、自我は念々刹那々に矛盾の羈絆を脱して、自由の境に向はんとす、是故に宇宙にして自我に順應するに當りては、必ず彼も亦自我と同様なる因果法の行はるゝを要す、宇

宙と我と同一の法則の下に活動する以上は、自我は宇宙に順應すとも考ふるを得べく、同時に宇宙は自我に順應すとも云ふを得、換言すれば宇宙と云ふも、自我と云ふも、實に同一體に過ぎざるのみ、天上天下唯我獨尊の叫によりて來り、一切唯法ありて我なしとの斷定は此より生ぜり、先には唯我と云ひ、後には唯法と稱するも、敢て矛盾するに非ずして、我と法との根本的一なることを顯すものなり。

主觀的に考察冥想せば、自我は無限に矛盾しつゝ無限に統一し、宇宙の萬象は互に其分化しつゝあると同時に漸次に統一に歸し、遂に殆ど統一無雜の境に達するを見る、此れ敢て空論にあらず、吾人には時ありて何等の意欲なく、何等の疑問なく、悔なく、誇なく、他なく、物なく、已に足りて外に待つなき状態に至ることあるに非ずや、筋肉の感覺は外界の實在を提出せしむとは、心理學者の主張する所なれど、かくの如く感ずることは寧ろ自我の作用にして、自我活動の法則の爾らしむる所なら



すや、自我と外界と衝突するてふことも、結局自我の上の矛盾なり。外界は唯自我に機會を與ふ。されども全く自我を左右すること能はず。外界が自我を左右するてふことは、第一に自義の因果的法則の信念と矛盾するなり。自我の法則以外にありて何者か自我を攪亂する者ぞ。自我は獨在なり。絶對なり。我は斷じて我の上に立つ。大丈夫唯一に其所信を斷行せんのみ。良心の命する所を爲さんのみ。結果何する者ぞ。生命名譽何する物ぞ。他人何する物ぞ。我は唯我が主義に立て、唯一の大道を行くべきのみ。自尊獨立の信念は、是によりて直進直行、誠意正心の行爲として發表し來る。

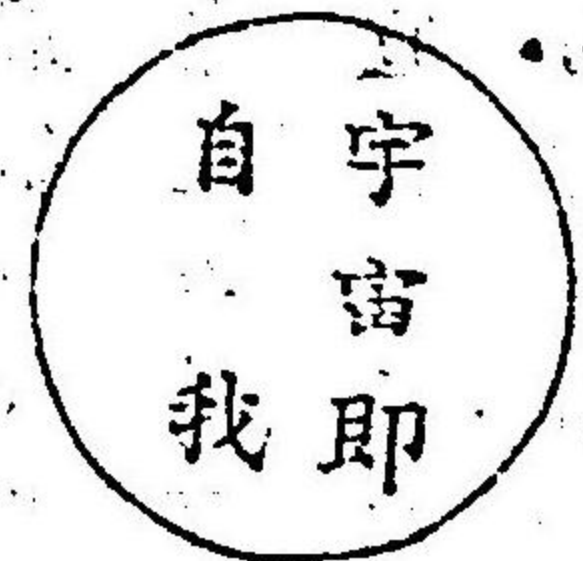
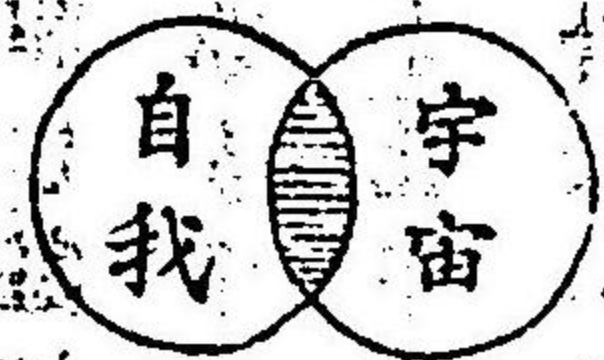
されどもかくの如き自我は決して他に對する小我にあらず。誠意正心は因果の大法の意識に外ならず。小我は私欲なり。私欲は必ず同時に矛盾を有す。私欲は自滅すべし。私欲來る時には必ず他を害せんと欲す。其結果が偶他を害せざるにもせよ、内心の決定は明に他を害せんとす

るものあり。抑も利害は相待的なり。例せば貨幣と物品との比の如し。物品の下落は同時に貨幣の騰貴なるが如く、己れ二箇を得、他に一箇を與へたりとせんか。此れ明に害他なり。他をして自己より少利ならしめんと欲する者なり。自己には少しく害して、他には多くを害せんとするものなり。是れ明に因果の信念に反し、調和の理想に違す。彼は是故に小我を破壊せんことを勉む。私欲の念破壊せられて、吾人は唯因果の大道を念す。見よ。私欲の念は一時は來る。されどもは一刹那にして忽ち破壊せず。や、彼忽ち來り、又忽ち去る。來りて來る所を知らず、去りて往く所を知らず。因果の明鏡上彼の入り來るを許さざるなり。悟れば忽ち去り、迷へば忽ち來る。去りて一點の痕跡なし。小我は單に夢に過ぎざるか。我を求ざるに我なしとは吾人の屢達し得る境界ならずや。忘我の状態は大自然に對する時、幾度も經驗したる所なり。自然主義の福音は是上に立つ。宇宙は唯因果的活動あり。宇宙に自覺なし。宇宙に人格なし。所謂獨我自尊



は此大宇宙に同化し融合したるものに外ならず。我は作すべからず思ふべからず。吾人は宇宙に反對して何事をもなすべからず。矛盾は破壊なり。調和は建設なり。客観には破壊と云ひ、主観には矛盾と云ふ。客観には建設と云ひ、主観には調和と云ふ。其言異なりと雖ども、其義一なり。是故に吾人は矛盾に着することなかれ。調和に執することなかれ。調和亦決して調和に終らずして、更に矛盾を生ず。大我亦永久大我たらずして更に小我に變せん。我は無限に開展し來りて遂に究竟の大我なし。大我と云ふも小我と云ふも唯比較的のみ。因は常に小我にして、果は常に大我なり。今の大我は過去に對して大我たるも、未來に對して小我たり。眞實の大我は要するに信仰に過ぎず。空想に外ならず。是故に吾人は唯宇宙の大道に隨はざるべからず。現實の我は無限に自滅すべし。無限に悟覺すべし。無限に解脱すべし。因果の觀念は全然自我を融合せず。吾人は意識的には一部因果法中にあれども、一部は常に之れを脱せんと欲す。

自我の觀念は實際上一部が因果法と矛盾す。吾人は全然因果法に對して自主自由なる能はず。吾人の行爲は必ず幾分他律的なり。吾人は因果法に羈絆せらるゝと意識す。吾人は義務の觀念ありて止を得ず事をなすを厭むることあり。吾人は全然唯心論的なること能はず。



上圖は事實なり、下圖は理想なり、其交錯部は知なり、調和せられたる自我なり、宇宙外の自我は無明なり、直接に知的自我と矛盾し、間接に宇宙と衝突す。

然れども吾人は到底厭世的なる能はず。厭世思想は自我が宇宙より脱却せんとするものなり。彼は宇宙の破壊的方面のみを見て、此を以て自我に矛盾を生せしめ、永久其平安を破壊するものなりとなし、隨て自我の矛盾を去らんが爲には、到底宇宙を解脱せざるべからずと信ずるものなり。然れども情考ふるに、自我ある所、何處にか宇宙なからん。是故



に厭世主義は無法主義なると同時に、無我主義なり。彼は自殺によるの外、決して其目的を達すべきにあらず。虚無論は吾等の信する能はざる所。彼は早晚再び矛盾を調和せんが爲に出で來らざるべからず。彼は宇宙の建設と自我の調和との關係を求め、此が上に大安心を建てざるを得ず。宇宙と自我とは、隨て破壊すれば隨て建設し、隨て矛盾すれば隨て調和し、益相接近しつゝ來るなり。道徳は漸次自律的に進み、自由は次第に來り、宇宙即自我の信念に到達し、其後益實際的融合に進みつゝあるなり。孔子世に立つと云ひ、釋迦世にして成道すと云は、實に信念の確立に外ならず。則ち「知行合一」の信念に外ならず。されど宇宙と自我と其開展念々に止まず、宇宙は再び同一の事件を繰復せずとせば、吾人の疑惑亦永久盡さるべし。唯其疑惑が「宇宙即我」の實在を否定せざるにあるのみ。宇宙は次第に自我に同化し來る。宇宙は實に自我の開展を贊するものなり。宇宙は自我の自滅を防守し、自我永久の生命を有たしむ。吾人は

安んぜん、安じて進まん、徳孤ならず必ず隣あるなり。

## 二、信仰確立の基礎

自我及び宇宙の存在は、已に疑ふべからず。然れどもそれは云何に存在するや。是れ吾人の實際上に要求する所にして、信仰は實に存在の法則の上に立つものなり。宇宙若し常住ならば、信仰亦常住なるべし。常住ならざれば、信仰亦無常なり。宇宙進化せば、信仰亦進化せん。

宇宙は活動なり。自我も活動なり。吾人は平常に當りては、活動といへば時間もあり、空間もあり、活動する實質もあり、此を活動せしむるの力もありと考ふれども、吾人が大事に處するに當りて、眞面目に感ずる所は、大に是に異なる所なり。吾人は唯元氣なり。宇宙唯力のみ。其性質の如きは、何等の意義を有せず。光明も力なり。實在も力なり。自己も力なり。他人も力なり。腕力亦力ならざるに非ず。されど彼は正義に對してのみ力あり。惡亦力なり。されど甚微弱なる力なり。見よ正義は以て生命財産を捨



て、顧みざるにあらずや。崇高は力なり。優美も亦力なり。吾人には常に力の觀念あり。感益大にして力の觀念益大なり。筋覺は實在觀念の根底なり。是ありて外界を知り、此ありて自我を知る。吾人の信仰も、行爲も此力なる觀念によりてあり。

世は力なり、活動なり、轉化なり。而して其活動は自我の活動と平行の益接近せんとするなり。換言すれば宇宙は次第に吾人の目的に隨ひ來るものなり。此故に活動は進化なり、宇宙には目的なきも、唯、吾人の目的に適應するなり。宇宙の活動は益々増加しつゝ來る。是故に實在の宇宙は唯現在一念のみ。過去の世界は已に去り、未來の世界は猶未だ來らず。世に常住なるものなし。生すれば則ち滅す。決してある物が外より生滅せしめらるゝに非ず。常住の實在が生滅變化すと考ふべからず。かゝれば變化せしむる勢力を要すべく、而して此勢力は夫れ自身亦常住なるを要す。隨て又此勢力を活動せしむる第二の勢力を考へざるべからず。

我は云何にするも世界の常住なる原動力を考ふること能はず。常住の實在てふとを考ふる時は、吾人は最早何事をもなさざるを可とす。吾人は原始混沌たる時代に復歸すれば足れり。亦吾人何の必要ありてか復雜なる活動をなすべき。而して吾人はかゝる信念を有すること能はず。吾人の起點は最も闇黒なりき、不明なりき、良心は過去に向て吾人を指導せず。吾人の向ふ所は未來なり。吾人の道路は直線なり。吾人は再び同一の點に來るを願はず。亦來る能はず。吾人は活動を迷妄なりと信せず。勿論墮落なりと思はず。吾人は唯能ふだけ膨脹せんと欲す。能ふだけ開展せんと欲す。勿論吾人の良心は虚飾を願はず、誇張を求めず。吾人の劣情は常に此を欲望すれども、吾人の理性は常に此を抑制せんとす。謙讓は理性の命ずる所。而も謙讓は最もよく實力を顯はさんとするものなり。吾人は常に一時の幸福なる状態を接續せしめんとす。唯之を破壊せられんことを恐る。爰に於てか執着あり。執着は一時の功業によりて、將



來の安佚を貪らんとするものなり。謙讓は一時の功業を破壊して、更にそれ以上の活動に進まんとするものなり。謙讓は現實を破壊して理想に進まんとするものなり。執着と云ひ誇張と云ふが如き感情の生ずる時、吾人には觀念なし。謙讓の觀念は最も力あり、實質的に擴張せんとする感情を有す。

吾人の最も大なる弱點は過去に安ずるの一事なり。吾人は常に是を去らんとす。而も吾人は時々過去を忘るゝことあるなり。吾人何事をかなさんと欲する時は過去は何等の意義なきなり。吾人は唯現在の努力を以て理想に進むあるのみ。實在は活動なり。世に潛勢力なし。吾人の價値は現在の一念にあり。過去は如何なる功あるも、云何なる罪あるも、そは決して彼の價値を左右すると能はず。過去の功罪は、其此をなしつゝある同時に、あらん力を以て發現され終りしなり。功をなしつゝあらざる時は、吾人は其刹那に於て無用の人なり。死せる人なり。吾人が過去の

偉人に感謝するは、古人の活動現今に吾人の心中に活動すればなり。更に換言すれば、吾人現に過去の偉人のなせし如く活動しつゝあればなり。唯現在の自己活動の直覺は、記憶作用によりて、過去の此に類似したる活動を喚起したるなり。而して記憶と云ふも、實には現在の活動なり。感動せざるとは、記憶する能はず。記憶しつゝある間は、現に感動されつゝあるなり。吾人は過去の罪を感ずる時、現に何等か實在して吾人を叱咤するを感せん。是れ過去の罪が吾人を責むるにあらすして、現在の罪なり。現に活動せる罪が吾人を責むるなり。唯過去てふ形を以て吾人を責むる能はず。吾人は唯現在を慎しむ。吾人は到底過去を回復する能はず。回復する能はざるにあらすして、回復するの要なきなり。回復すべし過去の最早存在せざるなり。凡てなしたることは、此をなせし同時に悉く顯現し終れり。是故に既往をば咎めざるなり。功は忘れよと云ひつゝ、罪を記憶せよと云ふは理由なきとなり。吾人は功を忘るゝと



時に罪を失却するを要す。罪の觀念を喚起す時は、少くも其現在墮落せるなり。天真を害せるなり。無明に縛せらるゝなり。恐怖心を生ずるなり。人は刹那々に功罪相償ふ者なり。因果は念々に行はれつゝあるなり。人を評價するに當りては、其一代の功罪を數學的に計算するを普通とす。然れども是れ止を得ざるに出づるものにして、其實一刹那毎に評價せざるべからざるなり。社會的評價は決して其人の真相を示す能はず。社會的評價は靜的評價なり。進歩を否定したる評價なり。信仰は主觀評價にして、實に自己の現在を評價す。彼は過去に對して無責任を宣告するなり。過去に向て、あきらむるなり。念己自己の生滅することを信するなり。生滅あるが故に希望あり。吾人は「あらん程の力を顯現するが故に自己の存在は一刹那なり。一刹那にして凡ての力を消盡せしなり。是故に滅は自然なり。滅せしむるの力なり。滅は力の滅せし状態なり。此滅ある故に次の生は來る。其來るや知るべからず。吾人は到底知るべからず。

是れ實に不思議なり。さりとて吾人は常住のものが生滅するてふことを考ふる能はず。全然常住の觀念を否定するの適當なるを見るのみならず、吾人の信仰は唯現在の力を感ずるのみなればなり。信仰の對象は絶對なり。絶對は過去に關せず。二箇以上の實在を許さず。現今の我の外決して實在なきなり。

然らば因果の大法の信仰は云何にすべきか。因果は二箇の状態が併在するに非ず。因は前刹那の状態にして、果は前刹那の状態なり。此連續せる状態の間に、必ずしかあるべき理由あり。此を因果法と云ふ。因果法とは進化の法則なり。因は矛盾なり。果は調和なり。因なる一状態には、存立的方面と破壊的方面とあり。前者は實在にして、後者は理想なり。理想は其存立を破壊して自己に同化せんと欲す。理想は空想なり。而も其次刹那には現實として現はる。則ち因中の矛盾を調和し終れり。果は因の現實と理想との合計なり。是故に因果法は因果類似を主張すべく、全



く同一を断定すべからず。因果法は唯信仰なりしかと迷妄にあらず。認  
 識の理由なり。因果二状態を統一する實在はなきなり。過去は再び現在  
 せず。かりに統一の實在ありとするも、過去現在異なる状態なるが故に、  
 過去は過去の儘には來らず。少くも現在の改進せらるゝなり。此れ佛  
 教に無我論を主張する根底にして、進化改善の實際上の要求より來る  
 所なり。

因果法の信仰は現存の因を理想的に改造し、實現せんとするものな  
 り。理想に向て必然的に進むものなり。理想の自然に實現し得べきことを  
 現在の自我が直觀すると、是れ唯一の信仰なり。換言すれば進化の大法  
 直覺なり。眞面目に猛進して空想を實現せんとするの謂に外ならず。

三、信仰の上に立てる行爲

吾人の信仰は宇宙の開展の上に立つ。是故に積極的に云へば將來に  
 向て求むるなり。希望ある生活なり。然れども此を消極的に云はば解脱

なり。過去を忘るゝなり。因縁とあきらむるなり。過去の習慣と絶縁する  
 なり。吾人は惡を絶つべし。獨惡のみならず過去の善をも絶たざるべか  
 らず。吾人は惡をも因縁とあきらむると同時に、善をも因縁とあきらめ  
 ざるべからず。吾人は善を以て其功を誇らざるのみならず、此善を其儘  
 に持續せんと願ふべからず。善を持續するとは、此に固執するなり。是に  
 て満足せんとするなり。過去に専注するなり。専ら防守に盡すなり。是れ  
 吾人の勢力を徒消するものなり。已に去りたる幻影を逐ひつゝあるな  
 り。

吾人縱令信仰の門に入りたりとするも、智と行とは往々撞着し、時々  
 過去習慣の力に支配せらるゝとなきにあらず。信仰は必しも平常百般  
 の行爲を律し得るものにあらず。唯信仰は大事に處して最も明了に活  
 動す。信仰は唯大體上に於て生活の方針を示すに過ぎず。信仰は大事に  
 臨では云何なる情實をも絶滅す。吾人は大義を決行するに當り、家を捨



て、眷屬を捨て、其生命をすら捨て、顧みざらんと思ふ。然れども平常にありては、或る範圍までは過去に執すること可なり、或る程度迄では過去の功を記憶すると可なり、罪に拘泥するも可なり、他を賞罰するも亦可なり。而も一度一定の程度を超ゆるに至らば、信仰は斷然として之れを排反す、吾人若し過去の罪に關して非常に苦悶しつゝ、將來の改善をすら忘れ、絶望の淵に入らんとするや、信仰は、汝に罪なし、罪ありと思ふところ、是れ其罪ある所以なれと絶叫す。爾り罪てふとの客觀的行動は過去にありと、已に其犯罪の同時に消滅したり。而も彼が罪てふとを回想して犯罪の當時に及ぶ時、恐怖の心生じ來りて、忽ち先の殘忍なる心と轉じ、無邪氣にして快活なる性格、何時しか見る能はざるに至れり。此際信仰の命令の來るとなくんば、彼は再び魔道に墮落せしなり。懺悔は絶對的價值あるものにあらす、吾人は時々此を以て其信仰を鍛鍊するの要ありと雖ども、決して此を濫用すべからず。吾人の前途に當りて幾多

の妨害物あり、吾人寧ろ此方面に向て勇猛の心を以て當らざるべからず。吾人は決して故意に恐怖心を起すべきにあらす。過去の罪も亦因縁にあらすや、過去の罪の自然に消滅することも因縁にあらすや、自然の大法に貯蓄なきにあらすや、唯自然の大道に隨て自然が求めしむるものを求めんのみ。良心は尊嚴なり、罪何かあらむ。君子の過は日月の蝕の如くなるべし、一步々世の終なりと思ひ、結果を求むるなかれ、福利を希ふ勿れ、自己の力を奮ふと程榮譽なるとなし、世人が之れを認容して、此を成功せしめしとは、至大の恩寵なり。吾人更に何をか求めん。吾人は唯能ふ丈けの力を奮て、能ふ丈け多くを求めむ。而も之を求めて之を得ざる亦何かあらん。良心は吾人を慰して曰く、汝現に得べき凡てを得たり。汝は今あり能ふ最良の地位にあり。汝が求むる所は、吾は之れを永久の間に汝に與へむと。吾人は此尊嚴なる命令を確信し、着々として歩み、而も其進歩の遅々たるに絶望せざるなり。



宗 教 管 見 終

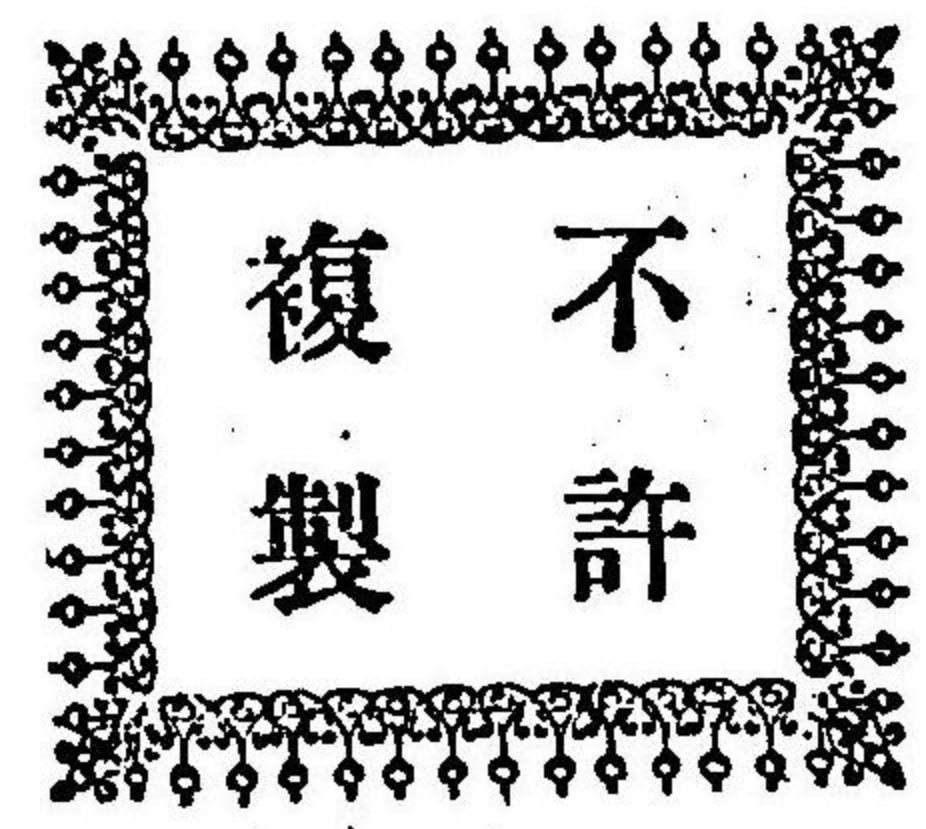
明 治 三 十 四 年 二 月 二 十 五 日 印 刷  
明 治 三 十 四 年 三 月 一 日 發 行

宗 教 管 見 附 錄  
定 價 金 貳 拾 錢

著 作 者 楠 龍 造

印 發 刷 行 者 兼 西 村 七 兵 衛

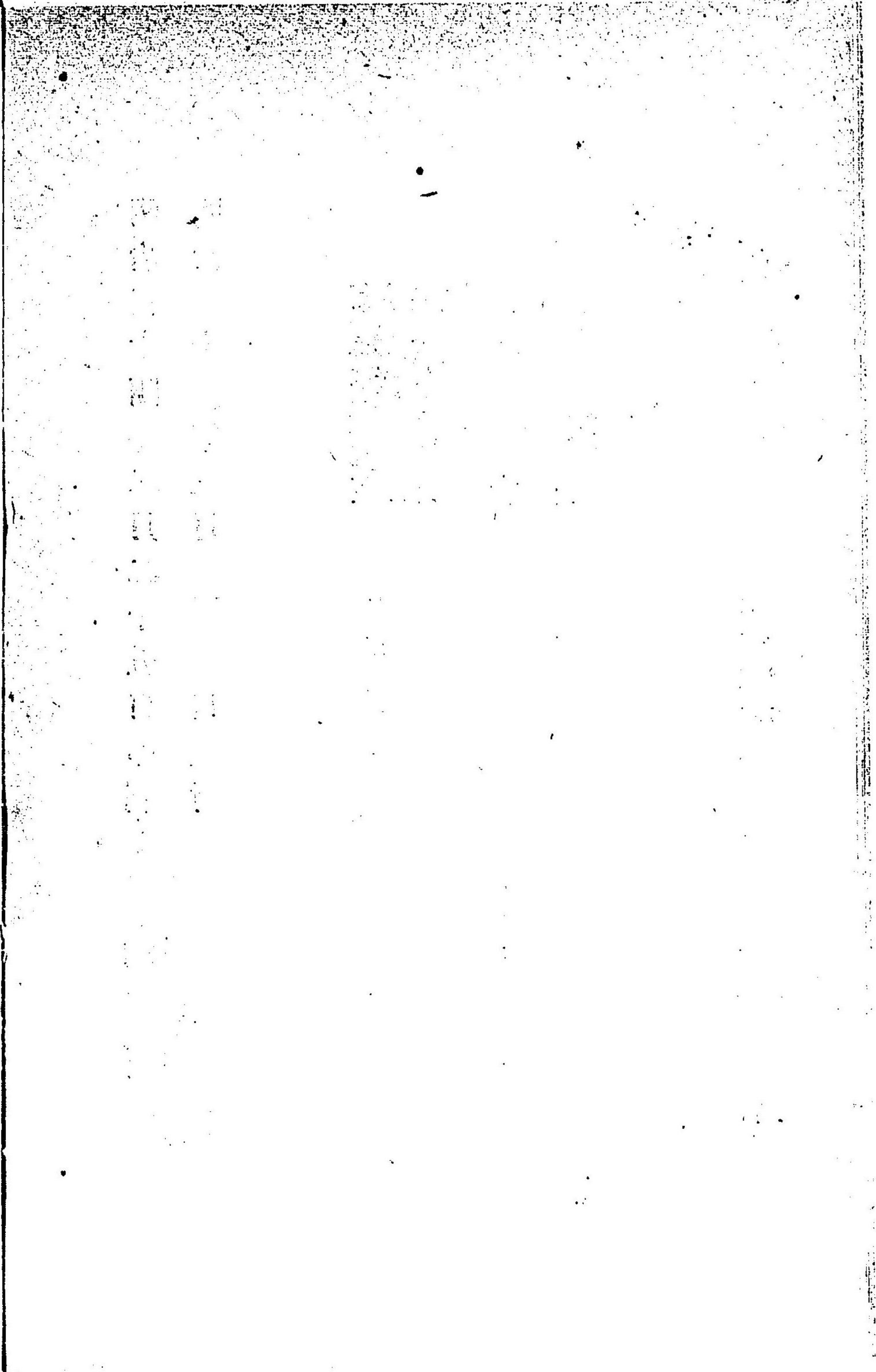
京 都 市 下 京 區 中 珠 數 屋 町 烏 丸 東 入  
二 十 八 番 戶



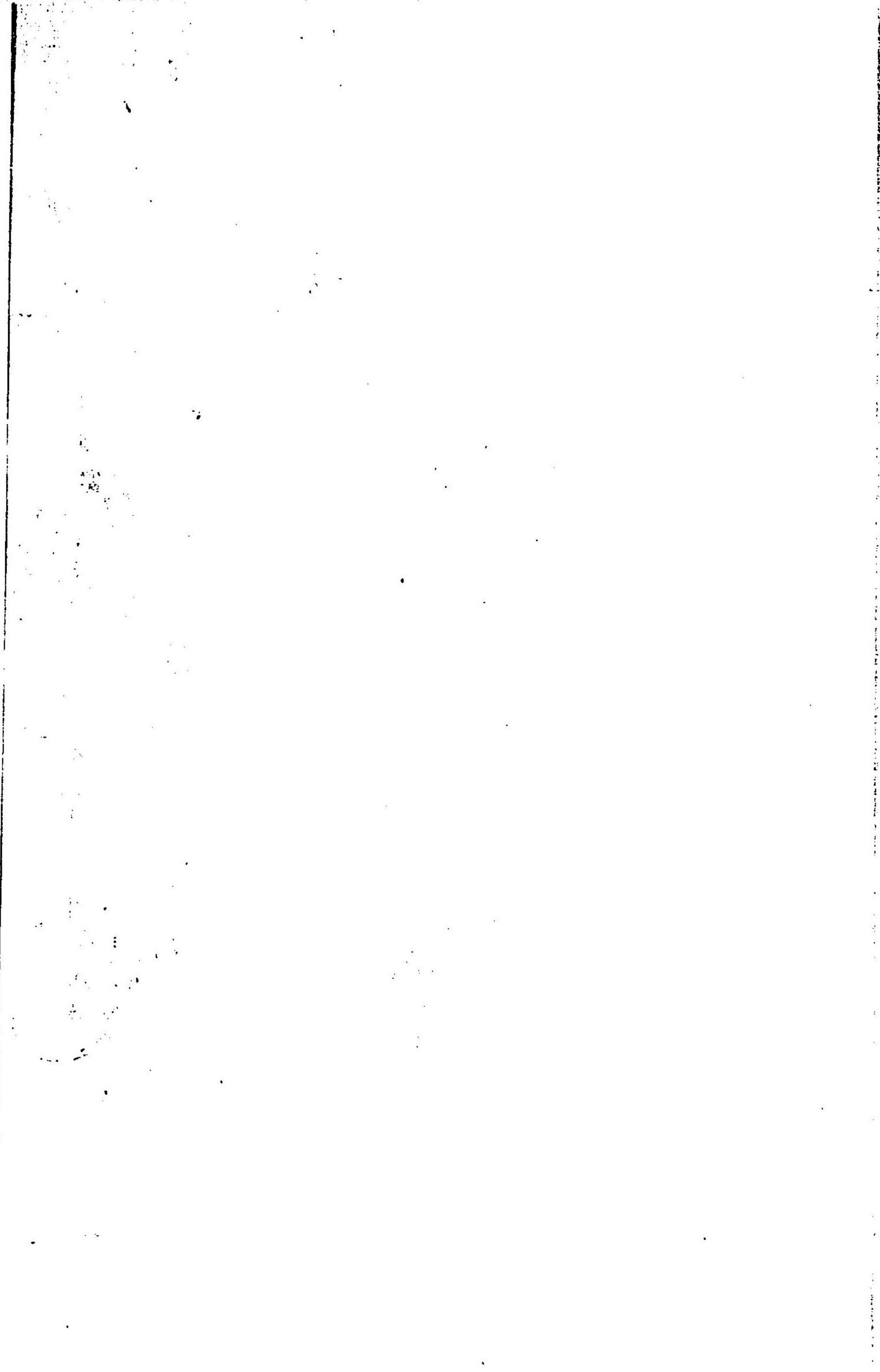
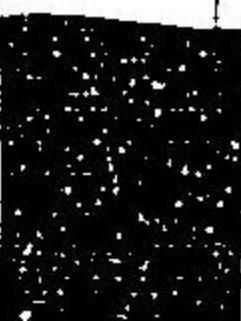
發 行 所 法 藏 館

京 都 市 東 六 條  
中 珠 數 屋 町

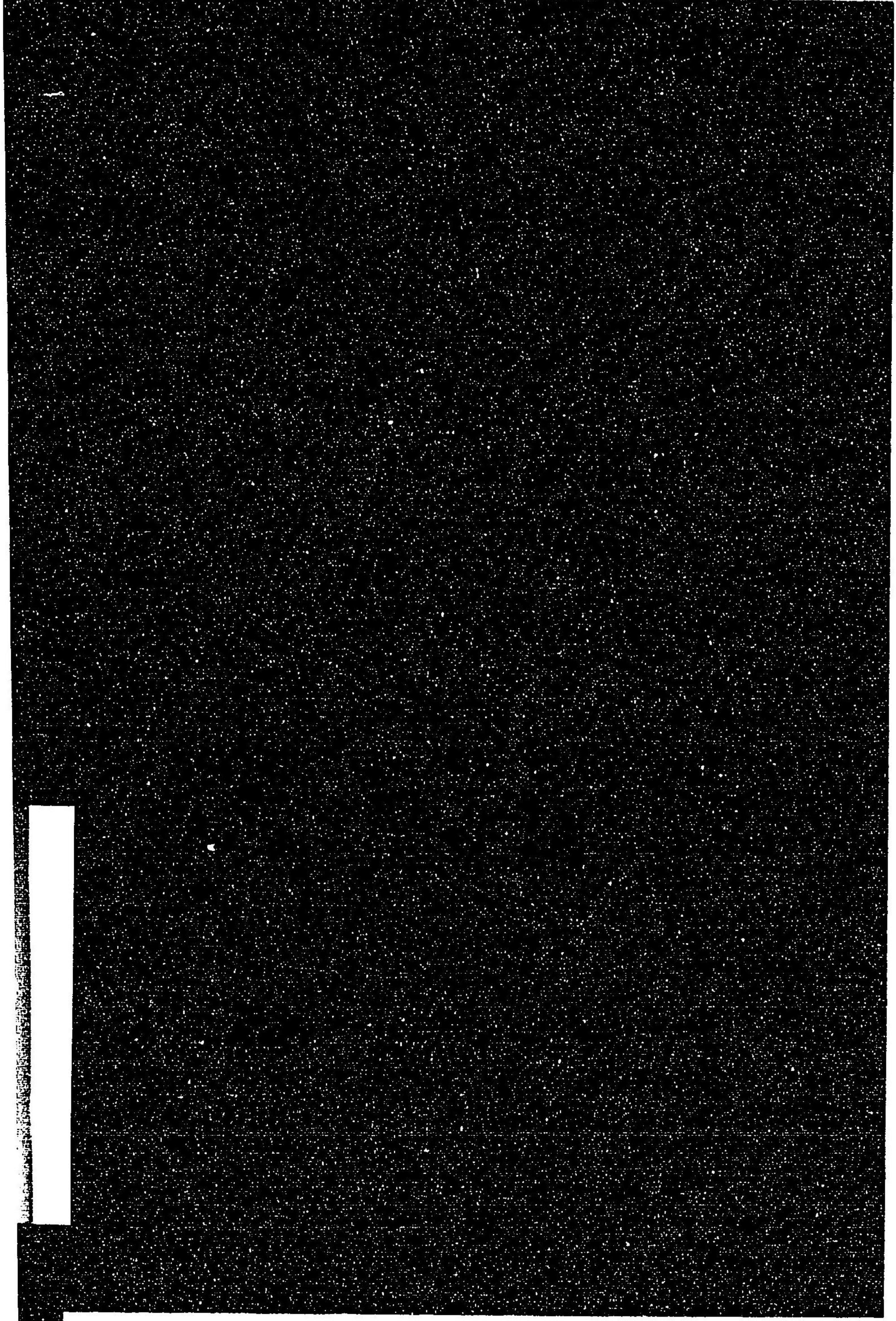












[Redacted]

[Redacted]



特 18

59

宗教管見

国立国会図書館

013607-000-0

特18-59

宗教管見

楠 龍造/著

M34

ABA-0076

